

南郷遺跡

長野県上伊那郡長谷村大字溝口

中山間地域総合整備事業溝口地区圃場整備事業
に伴う埋蔵文化財緊急発掘報告書

2000年

長野県上伊那地方事務所
長谷村教育委員会

南郷遺跡

長野県上伊那郡長谷村大字溝口

中山間地域総合整備事業溝口地区圃場整備事業
に伴う埋蔵文化財緊急発掘報告書

2000年

長野県上伊那地方事務所
長谷村教育委員会

口絵1



上、下、南郷遺跡空撮

口絵2



上、第2号住居址 下、第4号住居址

図版3



地質調査B地点の調査坑

最上部の白っぽく見える地層は地滑り性の二次性堆積物

地質調査B地点の調査坑壁面

真ん中に白く見える地層が御獄第1テフラで粗粒な軽石からなる。左側に御獄スコリア層が見える。



地質調査B地点の御獄第1軽石層
(On-Pm1)の近写

粘土化と変質が進み地層の厚さも変化している。



口絵4



第2号住居址出土土器



第4号住居址出土土器



第4号住居址出土土器



第4号住居址出土土器

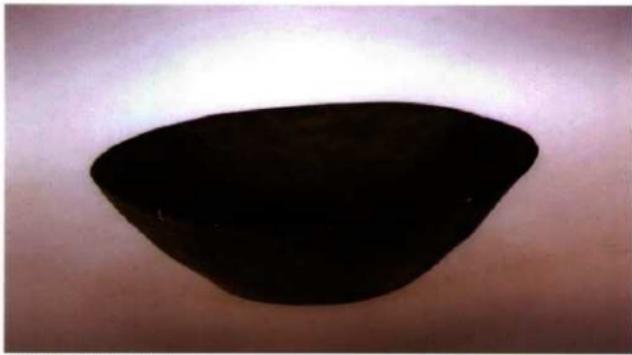
口繪5



第4号住居址出土土器



第4号住居址出土土器



第4号住居址出土土器

口絵6

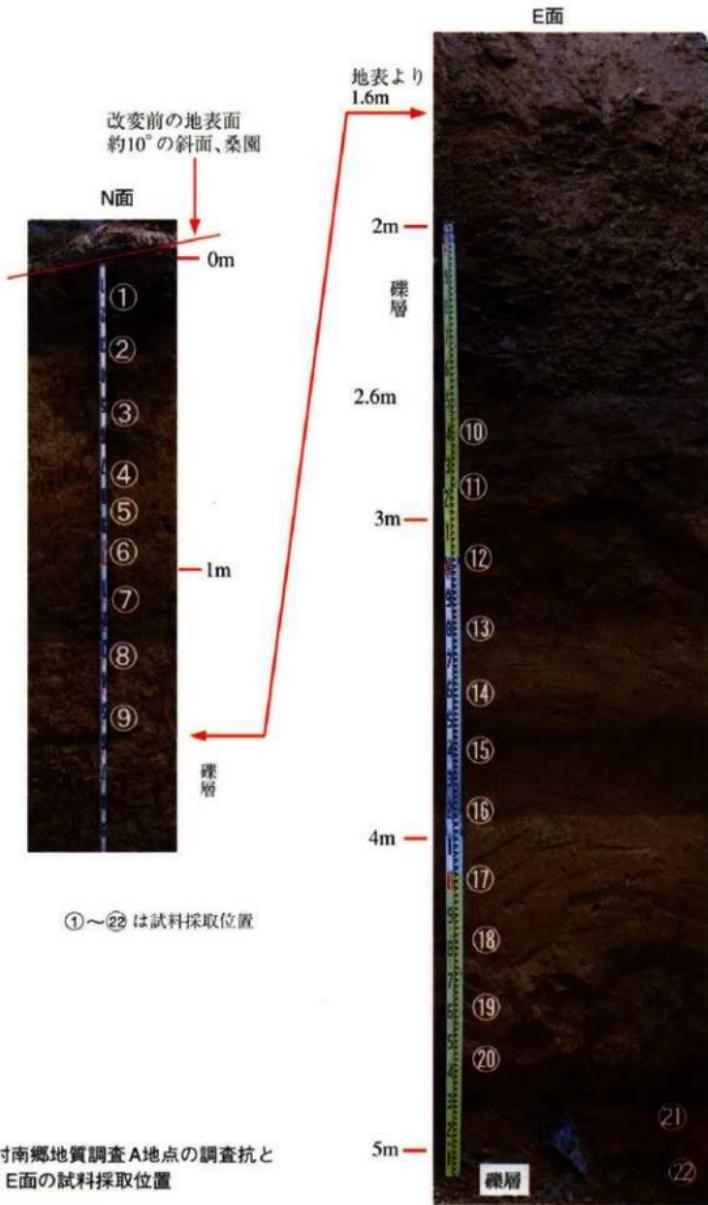


第4号住居址出土土師器壺

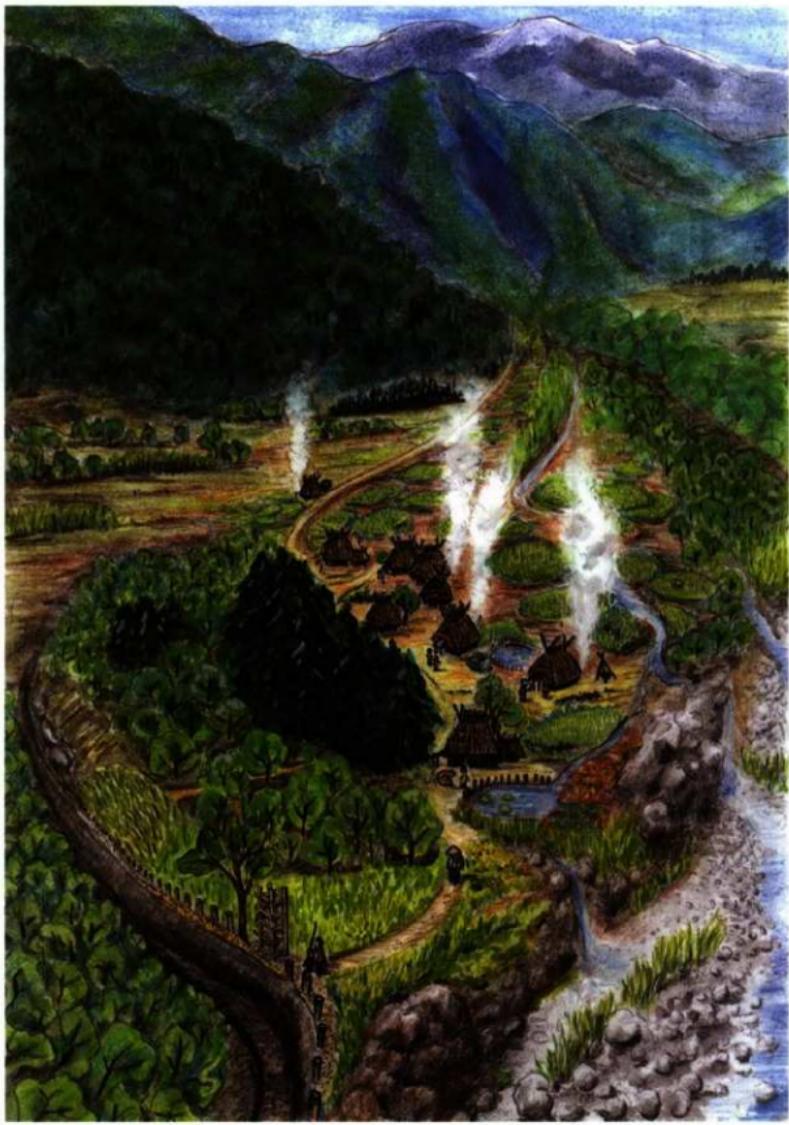


第3号住居址出土墨書き土器

図版7



口絵8



南郷道跡 想像絵

鈴木 姪

発刊にあたって

本報告書は、中山間地域総合整備事業溝口南郷地区圃場整備工事の施工に伴い、消滅してしまう恐れのある南郷遺跡を記録保存するため行われた緊急発掘調査の記録であります。

発掘調査は、溝口南郷地区の田畠約25,000m²を対象として、平成11年6月1日から、6月21日まで3週間にわたり実施されました。

調査の結果、平安時代後葉の住居址9軒などが確認され、その住居址内からは平安時代の土師器の碗、灰釉陶器、須恵器の壺など300点に及ぶ遺物が出土しました。また、各住居址には石芯の粘土竈が設けられており、当時の人々の生活様式が少しづつ見えてきました。残念なことに、本遺跡においても、以前発掘調査を行った泉原遺跡と同じく一部が今までの土地改良工事などで切り取られてしまい、全貌を知ることはできませんでした。しかし、長谷村ではこのようにまとまった平安時代の集落跡は今まで確認されておらず、今後の研究資料となるたいへん貴重かつ重要な役割を果たす遺跡であると確信しております。

今回の調査にあたり、快く調査の実施にご協力をいただいた土地所有者の方々、また発掘調査のご指導、出土品の整理、報告書の作成にご尽力いただいた調査団長の友野良一先生をはじめ、調査団、作業員の皆様、関係各位に心より感謝申し上げるとともに、この報告書が今後の教育文化に活用されることを願い発刊のことばとさせていただきます。

平成12年3月

長谷村教育委員会

教育長 伊東耕平

例　　言

1. 本報告書は、平成11年度実施した中山間地総合整備事業溝口地区圃場整備事業に伴う、埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は、長谷村役場の委託により長谷村教育委員会が実施した。
3. 本報告書は、短期間にまとめるよう要求されているため、調査によって検出された遺構、遺物はより多く図示、図版化することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。
4. 第3章第2節中遺物分布については、下記のとおり図示した。
凡例 ●土器　■土師器　▲石器　○陶器　▣灰釉
△黒曜石　×鉄器　★その他
5. 本報告書の執筆者及び図版制作者は次のとおりである。
○本文執筆者　友野良一、松島信幸、寺平 宏、中山善郎、伊東耕平、松田元伸
○図版制作者　友野良一、小松正人、奥田静子、唐沢春恵、鈴木和恵、青木 実、松本ひろみ
○写真撮影　友野良一、中山善郎、松田元伸
5. 本報告書の編集は主として長谷村教育委員会がおこなった。
6. 遺物及び実測図類は長谷村教育委員会が保管している。

目 次

口絵
序
例言

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査会の組織	1
第3節 発掘調査の経過	1
第2章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第2節 地形及び地質	6
第3節 歴史的環境	12
第3章 遺構と遺物	15
第1節 調査の概要	15
第2節 遺構と遺物	16
第1号住居址	16
遺物	16
第2号住居址	17
遺物	17
第3号住居址	20
遺物	21
第4号住居址	22
遺物	22
第5号住居址	26
遺物	26
第6号住居址	27
遺物	27
第7号住居址	29
遺物	29
第8号住居址	30
遺物	31
第9号住居址	33
遺物	33
第1号址	34
遺物	35
第2号址	35
遺物	35
第1号竪穴址	37
第2号竪穴址	37
第3号竪穴址	37
遺物	37
第1土壤	38
第2土壤	38
第3土壤	38
第4土壤	38

第5土壤	38
第6土壤	38
第1ピット郡	39
第2号掘立建物址	39
遺物	40
トレンチ調査	40
遺物	40
表面採取遺物	40
まとめ（参考文献含）	42
遺物一覧表	44
写真図版	47

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	3
第2図 南郷遺跡周辺の遺跡分布図	4
第3図 南郷調査地及び地形地質断面	7
第4図 地質調査地点	8
第5図 地質調査A地点のスケッチ	9
第6図 地質調査B地点のスケッチ	10
第7図 南郷小字名	13
第8図 住居址分布図	14
第9図 調査トレンチ	15
第10図 第1号住居址実測図・遺物分布図	16
第11図 第1号住居址遺物実測図	17
第12図 第2号住居址実測図・遺物分布図	18
第13図 第2号住居址遺物実測図	19
第14図 第3号住居址実測図・遺物分布図	20
第15図 第3号住居址遺物実測図	21
第16図 第4号住居址実測図・遺物分布図	22
第17図 第4号住居址遺物実測図	23
第18図 第4号住居址遺物実測図	24
第19図 第4号住居址遺物実測図	25
第20図 第5号住居址実測図・遺物分布図	26
第21図 第5号住居址遺物実測図	27
第22図 第6号住居址実測図	27
第23図 第6号住居址遺物分布図	28
第24図 第6号住居址遺物実測図	28
第25図 第7号住居址実測図・遺物分布図	29
第26図 第7号住居址遺物実測図	30
第27図 第8号住居址実測図	30
第28図 第8号住居址遺物分布図	31
第29図 第8号住居址遺物実測図	32
第30図 第9号住居址実測図・遺物分布図	33
第31図 第9号住居址遺物実測図	34
第32図 第1号址実測図・遺物分布図	34
第33図 第1号址遺物石器実測図	35
第34図 第1号址実測図・遺物分布図	35
第35図 第2号・遺物実測図	36
第36図 第1,2号竪穴址実測図	37
第37図 第3号竪穴址実測図	37
第37図 第3号竪穴址石器実測図	37
第38図 第1土壤実測図	38
第39図 第2土壤実測図	38
第40図 第3土壤実測図	38
第41図 第4土壤実測図	38
第42図 第5土壤実測図	38
第43図 第6土壤実測図	38
第44図 第1ピット郡実測図	39
第45図 第2号掘立建物址実測図	39
第46図 第2号掘立建物址遺物石器実測図	40
第47図 トレンチ調査 表面採取遺物実測図	41
表1 長谷村内遺跡一覧表	5
表2 地質調査A地点の試料分析結果	11
写真1 南郷集落のある斜面	6
写真2 南郷地籍空撮	6
写真3 南郷地蔵堂付近「辻」	12
写真4 桑田薬師堂	12

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

県営中山間地総合整備事業地区内遺跡の調査は、同事業圃場整備地区内に周知の埋蔵文化財包蔵箇所があるので、事業実施に先立ち発掘調査を行い記録を保存する必要が生じた。平成10年6月1日、上伊那地方事務所長と長谷村長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結され、長谷村役場の委託により長谷村教育委員会、南郷遺跡発掘調査団が発掘業務を遂行することになった。

平成10年6月1日に教育長、長谷村文化財専門委員、調査団、作業員等が現場に参集して安全祈願を行い発掘調査を開始した。

第2節 調査会の組織

○長谷村教育委員会

教育委員長	北原正美
同職務代理	中山汎圓
教育委員	渋谷一郎
	宮下公平
教育長	伊東耕平
教育次長	伊藤由紀子
生涯学習係長	中村徳彦
同係	松田元伸

○南郷遺跡発掘調査団

団長	友野良一（日本考古学协会会员）
副団長	中山善郎（長谷村文化財専門委員長）
調査員	松島信幸（第四紀学会員）
	寺平 宏（第四紀学会員）

第3節 発掘調査の経過

発掘調査日誌

1999

- 友野良一団長以下13名により安全祈願を挙行。団長から発掘業務に関する指示を受け、現場作業開始。K-6 メッシュ付近よりトレンチ法による構造埋蔵箇所把握のための試掘調査を始める。
(バックホーによる表土剥ぎ) K-6 メッシュ付近より石器出土。遺物（灰釉陶器）出土。M-6 メッシュ付近より住居址床面らしき遺構を確認。続いて石器出土。
- Q-7 メッシュ地点を抜げる。H-5、I-5 地点より南へ幅3mのトレンチを開ける。（第1、2トレンチ） H-6より南へ20mほど開けたトレンチより遺物（繩文中期土器片）出土。Q-8 メッシュ付近より石芯粘土竈出土。住居址床面が確認できため第1号住居址とする。トレンチ調査の結果を記録保存するため、各トレンチ断面の実測写真撮影を開始する。
- 第1号住居址の整備。ベルトを残し住居址床面を確認する。住居址の床面を実測。
- 雨天のため発掘作業中止。
- 第1号住居址図化。遺物の出土地点を図面におとす。床面整備後写真撮影。第1号住居址北側より竪穴出土。第9トレンチを人力掘削した結果、6つの土壙を発見したためトレンチ全体を実測図化する。
- 第12トレンチ拡張。遺物（内耳、擂鉢）出土。第13トレンチを抜け人力掘削。第12トレンチ人力掘削中住居址床面らしき箇所を確認。黒土を除き床面を整備するも住居址とは断定できず第1号址とする。

- 6.9 O-5 メッシュ付近にトレンチを開ける。（第46トレンチ）土垂出土。K-13メッシュ付近にトレンチを開ける。（第36、37、38トレンチ）K-13メッシュ付近より土師器片出土。第1号址の整備、実測図化。
- 6.10 N-6 メッシュ付近より3m間隔で、幅2mのトレンチを4本開ける。（第47、48、49、50トレンチ）第46トレンチ中央より住居址らしき遺構を認める。人力掘削による調査後床面を確認。第2号住居址とする。
- 6.11 D-9 メッシュ付近より西へ3m間隔でトレンチを5本開ける。（第24、25、26、27、28トレンチ）第25トレンチより遺構を確認。遺構が集中していると思われるL-6、M-6 メッシュ付近（第47、48、49、50トレンチ）を全体的に掘り下げる。M-5 メッシュ地点より住居址床面らしき遺構を確認、人力掘削を行った結果、床面が確認されたため第3号住居址とする。（墨書き土器片、灰釉陶器片出土）第3号住居址東壁より石圓炉出土。
- 6.14 N-6 メッシュ付近より住居址床面を確認、第4号住居址とする。M-6 メッシュ付近より住居址らしき遺構を認める。人力掘削の結果、床面を確認、第5号住居址とする。K-5 メッシュ付近より住居址らしき遺構を認める。第3号住居址内の遺物を取り上げた後、実測図化。床、壁面整備後、写真撮影。第4号住居址実測図化。床面整備後写真撮影。
- 6.15 K-5 メッシュ付近より出土した遺構を整備。床面が認められたため第6号住居址とする。第5号住居址内の遺物を取り上げる。実測図化し、床面を整備した後写真撮影。
PM1:30に現場で発掘記念撮影。PM2:00～S-9メッシュ付近で松島信幸先生、寺平宏先生による地質調査。
- 6.16 AM9:00～PM2:30 寺平 宏先生による地質調査。F-9 メッシュ付近（第25トレンチ）より遺構を確認。F-10 メッシュ付近（第26トレンチ）より遺構を確認。
- 6.17 第6号住居址遺構内遺物の取り上げ。実測図化、床面を整備後写真撮影。F-9 メッシュ付近で確認された遺構を掘り下げた結果、住居址床面が認められたため第7号住居址とする。F-10 メッシュ付近で確認された遺構を第8号住居址とする。
- 6.18 Q-2 メッシュ付近より住居址らしき遺構出土。第9号住居址とする。第7号住居址実測図化。床面整備後写真撮影。
- 6.21 第8号住居址実測図化。第9号住居址実測図化。本日で現場作業を終了とし片付け。
- 6.22 出土遺物の整理、報告書作成のための整理作業開始。

↓

=発掘調査に参加いただいた方々（順不同・敬称略）=

宮下彦二 中山源一 伊東好一 小松正人 武居憲男 中山雅人 中山喜与子 倉田栄子

中山絆左子 羽場美和子 奥田静子 鈴木和恵 唐沢春恵

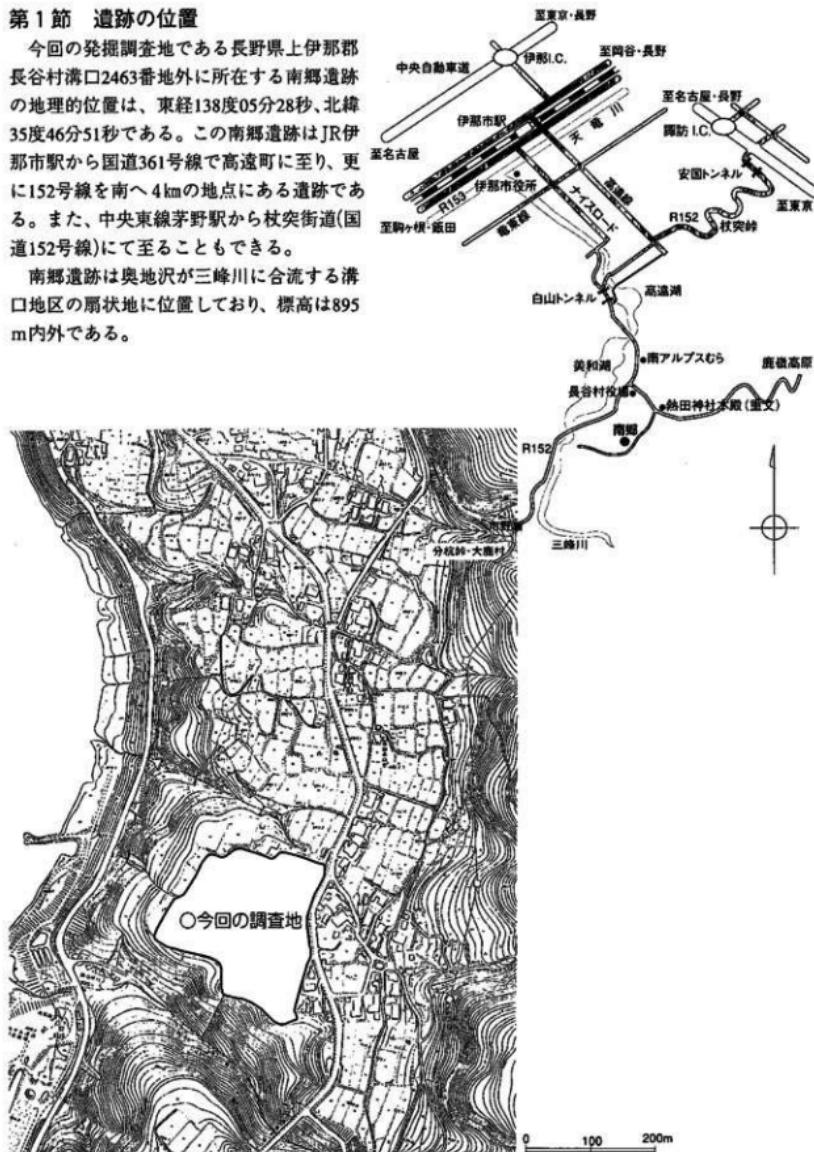
㈲東部建設 ㈱峰コンサル 長谷村役場職員

第2章 遺跡の環境

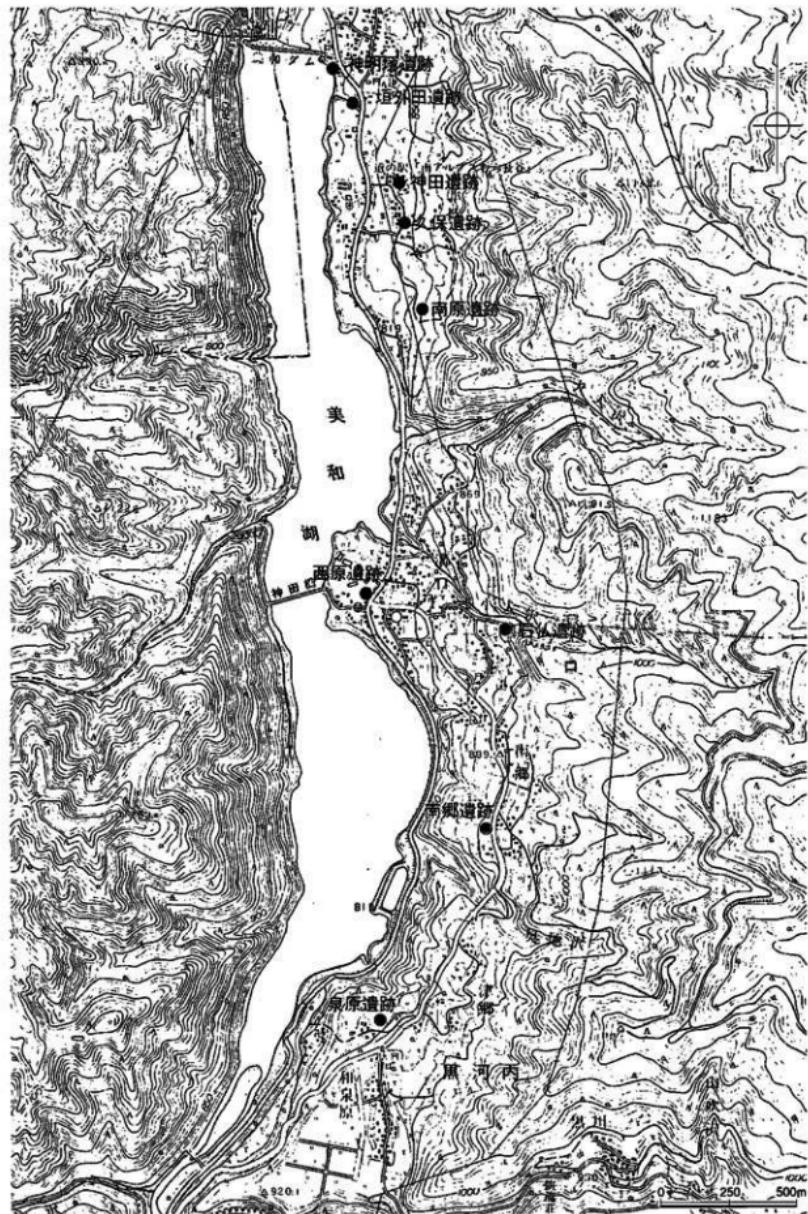
第1節 遺跡の位置

今回の発掘調査地である長野県上伊那郡長谷村溝口2463番地外に所在する南郷遺跡の地理的位置は、東経138度05分28秒、北緯35度46分51秒である。この南郷遺跡はJR伊那市駅から国道361号線で高遠町に至り、更に152号線を南へ4kmの地点にある遺跡である。また、中央東線茅野駅から杖突街道(国道152号線)にて至ることもできる。

南郷遺跡は奥地沢が三峰川に合流する構口地区的扇状地に位置しており、標高は895m内外である。



第1図 遺跡の位置



第2図 南郷遺跡及び周辺の遺跡分布図

表1 長谷村内遺跡一覧表

種別	時代	名 称	所 在 地	地 目	発掘歴	有無
散布地	古墳・奈良平安・中世・近世	荒神沢遺跡	非持山	山麓		
散布地	縄文中期・古墳・平安・中世・近世	狐塚遺跡	非持山	段丘斜面		
散布地	縄文中期・奈良・平安・中世・近世	一本木遺跡	非持山	扇央		
散布地	縄文中期・後期・平安・中世・近世	中原遺跡	非持山	扇頂		
散布地	縄文中期・後期・平安・中世・近世	下ノ中原遺跡	非持山	扇央		
散布地	縄文中期・後期・古墳・奈良・平安・中世・近世	中非持遺跡	中非持	段丘中央		
散布地	縄文中期・古墳・平安・近世	垣外田遺跡	中非持	段丘中央		
散布地	縄文中期・奈良・平安	神明冢遺跡	中非持	段丘縁部		
散布地	縄文中期・後期・平安・中世・近世	神田遺跡	中非持	扇央		
散布地	縄文中期・後期・平安・中世・近世	觀音寺畠遺跡	南非持	扇央		
散布地	縄文中期・後期・平安・中世・近世	久保遺跡	南非持	扇央		
散布地	縄文中期・後期・平安・中世・近世	南原遺跡	南非持	段丘斜面		
散布地	縄文中期・中世・近世	西原遺跡	溝口	段丘中央		
集落跡	縄文中期	石仏遺跡	溝口	段丘	住居跡・縄文中期7軒	有
集落跡	縄文中期・平安・近世	南郷遺跡	溝口	段丘中央	住居跡・平安後葉9軒	有
集落跡 城趾	縄文中期・後期・弥生(前、後期)奈良・平安	泉原遺跡	黒河内	扇央	住居跡・縄文中期27軒後葉1軒・平安3軒	有
散布地	中世・近世	和泉原遺跡	黒河内	段丘中央		
散布地	縄文中期・後期	的場遺跡	中尾	段丘中央		
散布地	縄文中期・後期・平安・近世	対座遺跡	中尾	段丘中央		
散布地	縄文中期・後期・平安・近世	市野瀬遺跡	市野瀬	扇央		
散布地	縄文中期・後期・平安・中世・近世	熊ノ森遺跡	市野瀬	段丘斜面		
散布地	旧石器・縄文	入笠山南遺跡	黒河内	山麓		

第2節 地形及び地質

南郷の地形

本調査地域は南郷の南端部である(写真1.2)。溝口区の南部が南郷であるから、調査地区は隣接する黒河内地区と向かい合っている。調査地域の南に奥地沢が流れている、この谷が両地区的境界線になっている。調査地域は美和湖に傾斜している斜面である。斜面は7°の傾斜で美和湖に向かっており、階段状の水田に耕作されている。斜面の上方に村道と南郷集落があり、集落より上方の小字洞口や林添へと斜面が続いている。集落より上では傾斜が10°を上回る。この斜面は鹿嶺山麓の末端部にできた小さな谷から下っている斜面である。

斜面の末端は比高70mの急崖で美和湖に面している。急崖は三峰川の側方浸食でできた段丘崖である。奥地沢に面した南側も、奥地沢の下刻によって深く掘り込まれている。このため調査地域は急崖にかこまれた段丘状の台地になっている。



写1.
南郷集落のある斜面
地質調査地点より山側を見る。2本の送電鉄塔があり、その間の谷から流れ下った砂や火山灰が斜面の上に広がっている。

写2. 空から見た南郷
中央を左上から右下へ奥地沢の谷と奥地沢橋が見える。
奥地沢より手前側が南郷、急斜面が美和湖に面する段丘崖。



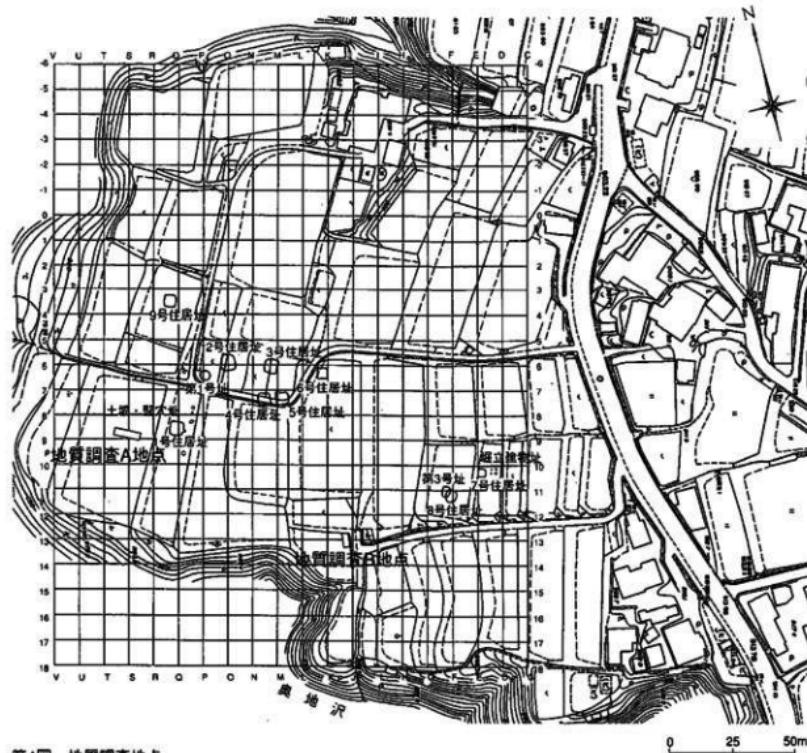


第3図 南郷調査地及び地形地質断面

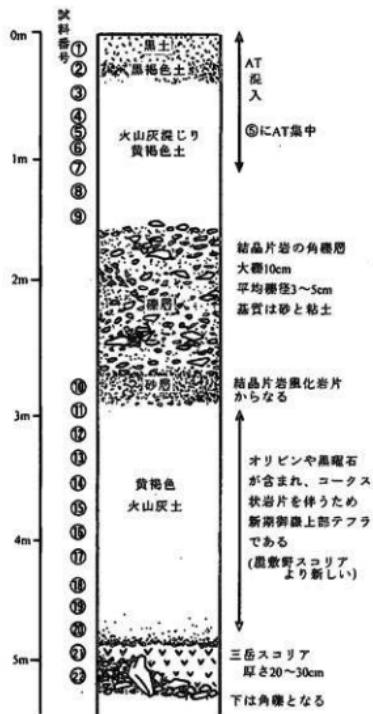
地質調査A地点の観察

地質調査A地点は斜面の末端に近い場所にトレンチを掘削して調べた(図4)。深さ5.4 mで礫層に達した。トレンチ壁面のスケッチ図(図5)および試料分析結果(表1)を示す。まず、調査A地点で得られた結果から説明する。

地表から深さ1.6 mまでが黄褐色土層である。火山灰が混じるため赤土っぽく見えるが40~50%は鹿嶺山麓から由来した結晶片岩類の風化砂粒である。細かい小石も混じっていて、斜面に再堆積した地層である。1.2 mの深さまで始良Tnテフラ(以下ATと記す)の火山ガラスが混入している。砂粒が斜面を移動しながら攪乱したと考えられる。また、2.5万年前を指示するATを含むことから、最終氷期の寒冷期の堆積物である。



第4図 地質調査地点



第5図 地質調査A地点のスケッチ

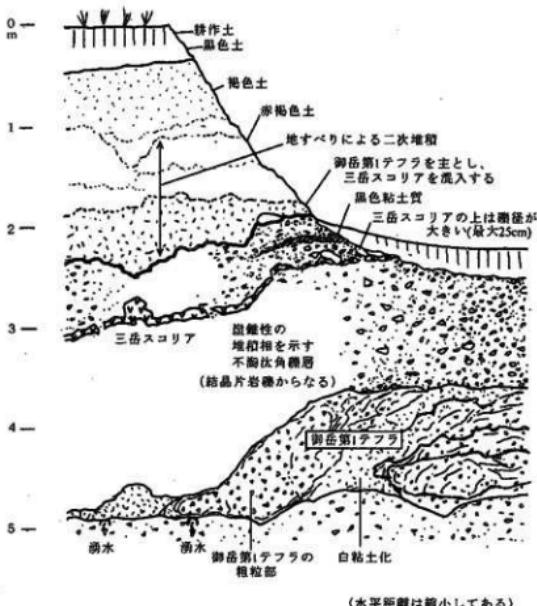
地質調査B地点の観察(図6)

調査B地点は調査A地点より約100 m上方(東側)で、斜面の南端にあたり、奥地沢に面した崖に近い。深さは北壁面側で5.5 m、南側で3.5 m、長さ約7 mのトレンチである。トレンチの壁面には全域に乱雑な堆積物が現れた。それらは上下2層に大別できる。上部層は厚さ2~3 mで地すべりによる二次堆積物である。二次堆積物には下位の地層に含まれる御嶽第1テフラ(On-Pml)を主とし、その上部に三岳スコリア(Mts)が混じった地層からなる。二次堆積のテフラ層より上は赤褐色土から褐色土である。

地すべり面より下位の堆積物は赤色の三岳スコリアとオレンジ色から白粘土化した厚い御嶽第1テフラを挟む砂礫層である。テフラも砂礫層も乱雑な岩相を示し、礫は不淘汰の角礫で、すべて結晶片岩礫からなる。乱雑な堆積状態から崖錐性の堆積情況が考えられる。御嶽第1テフラを含むことから10万年前ころから6万年前ころまでの長い期間の角礫層の堆積が考えられる。おそらく、この堆積物より下位には南郷の段丘を形成した礫層が出てくると想定される。

1.6 mから2.6 mまでの間が1 mの厚さの礫層である。礫種はすべて斜面上部から由来した結晶片岩類の角礫である。最大疊径10 cm、平均3~5 cmで、砂と粘土の基質に充填され、不淘汰の角礫層である。角礫層の直下には結晶片岩風化物からなる砂層がある。上部の黄褐色土層から角礫層まで深さ3 mまでの堆積物は特殊な環境下で形成した堆積物である。それが南郷斜面の最上部を覆っている。この地層の堆積相から復元できる斜面の形成は、寒冷の気候下で生産された碎屑物が斜面を匍匐するように滑り下った堆積物と考える。

3 mから下は厚さ1.8 mの黄褐色火山灰土である。これに含まれる火山起源の粒子はオリビンや黒曜石とコーカス状火山岩片をふくみ、新規御嶽火山活動の上部テフラ起源の火山灰であることを指示している。火山灰土の直下で、深さ5 mのところに厚さ20~30 cmの三岳スコリア(御嶽の赤色のスコリア)がある。その下は再び結晶片岩礫からなる角礫層になる。三岳スコリアから黄褐色火山灰土層までは風成層として段丘上を覆った堆積物である。約6万年前以降、3万年前くらいの間に斜面を覆った地層である。



(水平距離は縮小してある)

第6図 地質調査B地点のスケッチ

南郷の地質的な成り立ち

地質調査A・B地点の観察からは、南郷の斜面の表層部の地質が明らかになった。この斜面は鹿嶺側山麓から押し出した扇状地性の堆積物で覆われる。約10万年前ころから6万年前ころまでは、鹿嶺山麓から砂礫が断続的に押し出してきていた。このころ、南に隣接している黒河内地区の泉原では三峰川が形成した河岸段丘ができていて、段丘上には御嶽山の軽石や火山灰が降り積もっていた。しかし、南郷では同じ軽石が砂礫層の間に挟まれている。鹿嶺側からの砂礫が頻繁に流れ出てきていた証拠である。

トレーナーでは地表から5~6m下の地質までが確認できたにすぎない。南郷の台地は末端で70m余の崖を造っているから、そこまで調べれば、どのような地層が堆積しているかがわかつて、さらに古くさかのぼった生い立ちを明らかにすることができます。

南郷の斜面の最上部には3万年前から2万年前ころの最終氷期の最寒冷期の地層が載っている。この地層は山麓末端部から滑った地すべり性の堆積物(調査B地点)や山麓部の基盤岩が凍結破砕されてできた小角礫が滑ってきたような砂礫層(調査A地点)がある。こうした地層をさらに覆って基盤岩の風化砂粒を主とする粘土質砂層が見られる。これらの表層堆積物は奥地沢の方から供給されたのではなく、南郷集落の上方斜面から斜面上を移動する形で供給されたと考えられる。調査地の斜面と集落上の斜面は一続きの地形になっていて、このことを指示している。

(松島信幸・寺平 宏)

表2 地質調査A地点の試料分析結果

試料番号	地表からの高さ(cm)	土状	火山結晶ガラス	火山岩片	風化岩片	重鉱物斑晶	その他の鉱物・岩片等	火山ガラスの形態	特徴・対比その他
1	0.20	黒土	35	5	0	60	opx, mt, cpx, ho	結晶片岩片、fl, qt	++ bw, pm 基盤岩風化岩片 > 御岳テフラ > 始成Tnテフラ(AT)
2	20.40	黒褐色土	27	3	0	70	opx, mt	結晶片岩片、fl, qt	++ bw, pm 基盤岩風化岩片 > 御岳テフラ > AT
3	40.60	黄褐色土	33	7	0	60	opx, mt, cpx, ho	結晶片岩片、fl, qt	++ bw, pm 基盤岩風化岩片 > 御岳テフラ > AT
4	60.80	黄褐色土	53	7	0	50	opx, mt, cpx, ho	結晶片岩片、fl, qt	++ bw, pm 基盤岩風化岩片 > 御岳テフラ > AT
5	80.90	黄褐色土	20	50	0	30	opx, mt, cpx, ho	火山ガラス、fl、結晶岩片	+++ bw, pm 始成Tnテフラ(AT) > 風化岩片 > 御岳テフラ
6	90.100	黄褐色土	30	10	0	60	opx, mt, cpx, ho	fl結晶片岩片、火山ガラス	++ bw, pm 風化岩片 > 御岳テフラ > 始成Tnテフラ(AT)
7	100.120	黄褐色土, 1~2cm 巣状入	53	7	0	40	opx, mt, cpx, ho	fl結晶片岩片、qt	++ bw, pm 基盤岩風化岩片 > 御岳テフラ > AT
8	120.140	黄褐色土, 1~2cm 巣状入	60	0	0	40	opx, mt, cpx, ho	結晶片岩片、fl	御岳テフラ > 基盤岩風化岩片
9	140.160	黄褐色土, 1~2cm 巣状入	50	0	0	50	opx, mt, cpx, ho	結晶片岩片、fl	御岳テフラ > 基盤岩風化岩片
10	260.280	黄褐色土	20	0	0	80	opx, mt, ho	結晶片岩片、fl	風化岩片 > 御岳テフラ
11	280.300	黄褐色土	50	0	10	40	opx, mt, cpx, ho, ol	fl結晶片岩片、コーカス状岩片	御岳上部テフラ > 風化岩片
12	300.320	黄褐色土	50	0	10	40	opx, mt, cpx, ho, ol	fl結晶片岩片、コーカス状岩片	御岳上部テフラ > 風化岩片
13	320.340	黄褐色土	45	0	5	50	opx, mt, cpx, ho, ol	fl結晶片岩片、コーカス状岩片, ob	御岳上部テフラ > 風化岩片
14	340.360	黄褐色土	80	0	5	15	opx, mt, cpx, ho	fl結晶片岩片、コーカス状岩片	御岳上部テフラ > 風化岩片
15	360.380	黄褐色土	80	0	5	15	opx, mt, cpx, ho	fl結晶片岩片、コーカス状岩片, ob	御岳上部テフラ > 風化岩片
16	380.400	黄褐色土	85	0	10	5	opx, mt, cpx, ho, ol	fl結晶片岩片、コーカス状岩片, ob	御岳上部テフラ
17	400.420	黄褐色土	80	0	10	10	opx, mt, cpx	fl結晶片岩片、コーカス状岩片, ob	御岳上部テフラ > 風化岩片
18	420.440	黄褐色土	70	0	20	10	opx, mt, cpx	fl結晶片岩片、コーカス状岩片	御岳上部テフラ > 風化岩片
19	440.460	黄褐色土	70	0	5	25	opx, mt, (ho)	fl結晶片岩片	御岳上部テフラ > 風化岩片
20	460.480	黄褐色土	65	0	5	30	opx, mt, cpx, ho, bi(自形)	fl結晶片岩片、コーカス状岩片	御岳上部テフラ > 御岳第1テフラ > 風化岩片混在
21	480.500	赤色スコリア	70	0	25	5	opx, cpx, mt	fl, コーカス状岩片	三岳スコリア(MtS) > 風化岩片
22	500.520	赤色スコリア	90	0	10	0	opx, cpx, mt	fl, コーカス状岩片	三岳スコリア(MtS)

凡例

重鉱物斑晶 opx:斜方輝石, cpx:单斜輝石, mt:磁鐵鎌, ho:角閃石, ol:かんらん石
 その他の鉱物・岩片等 fl:風化母, ft:長石, qt:石英, ob:黒雲母

火山ガラスの量 +:1%以下, ++:1%~10%, +++:10%以上

火山ガラスの形態 bw:溶洞型, pm:管石型

()はごく僅か含まれるもの

第3節 歴史的環境

南郷地区は、北に溝口、南に黒河内地区の中間に位置する区域である。この地は南北約700m、東西約400mを囲む区域である。その標高は西で810m、東で940m、比高は120mである。

今回発掘調査が実施された地点より縄文中期中葉及び後葉、縄文後期、古墳時代、平安時代後半の遺物が数多く発見された。また、このうち南郷口、林添、清水畠、内垣内（ナカヤ垣内）、外林、権三郎作（以上小字名第7図参照）からは平安時代の住居址8軒、縄文中期後葉の住居址1軒、そのほか土壤、竪穴、掘立建物址などが発見された。これまでの上伊那の内では軒数的には多い村となった。のことから平安時代の村の一部と考えることができ、また「郷」としての在り方も考慮しておく必要があると考えられる。

地名としての「郷」は律令時代の地方区画制度の末端の単位とされ、昔の郡内の一区画、數村を合わせたものが「郷」とされている。大化の改新以後は50戸をもって一里としたが715年には里を郷と改め郷の下に小行政区として一郷を二、三に分割した里がおかれた。また、740年に廃止された郷里制も古代では六町四方を一郷といった。（昔は三百歩）以上の資料から現在の南郷地区を考えてみると南北700m、東西400mを割り約六町歩に近いので一郷とみてもよい区画である。

今回この南郷地区の歴史環境を調べるにあたりこの地区にどのような地名が存在するか、また平安時代に付けられたと思われる地名によりこの地区を調査、研究してみた。垣内は古くは垣の外のまわりを示したといわれている。南郷の村には「内垣内」、「北垣内」、「古垣内」などがみえる。これも一つの範囲の境を表している。また、「掘」なども古い豪族の居館の有ったことを示している。それに「矢塚」なども関わると考えられる。それと「堂の下」なども平安時代の信仰のあったところとしても考えられる。

この地の古い道としては、秋葉街道があるがこの街道は鎌倉以後である。今までそれより古い道については記されていない。しかし、平安時代の村が現在の非持、溝口、黒河内、中尾、市野瀬にも確認されているのでそれらの村に通ずる道があった事は考えられる。その道は山際の道、中間の道、川に沿った道が考えられる。それと山に入る道があったと考えられる。「辻」（写3）も村の中心にあったと考えられる。南郷では「洞口」付近、薬師堂あたりは今でも昔の面影をとどめている。

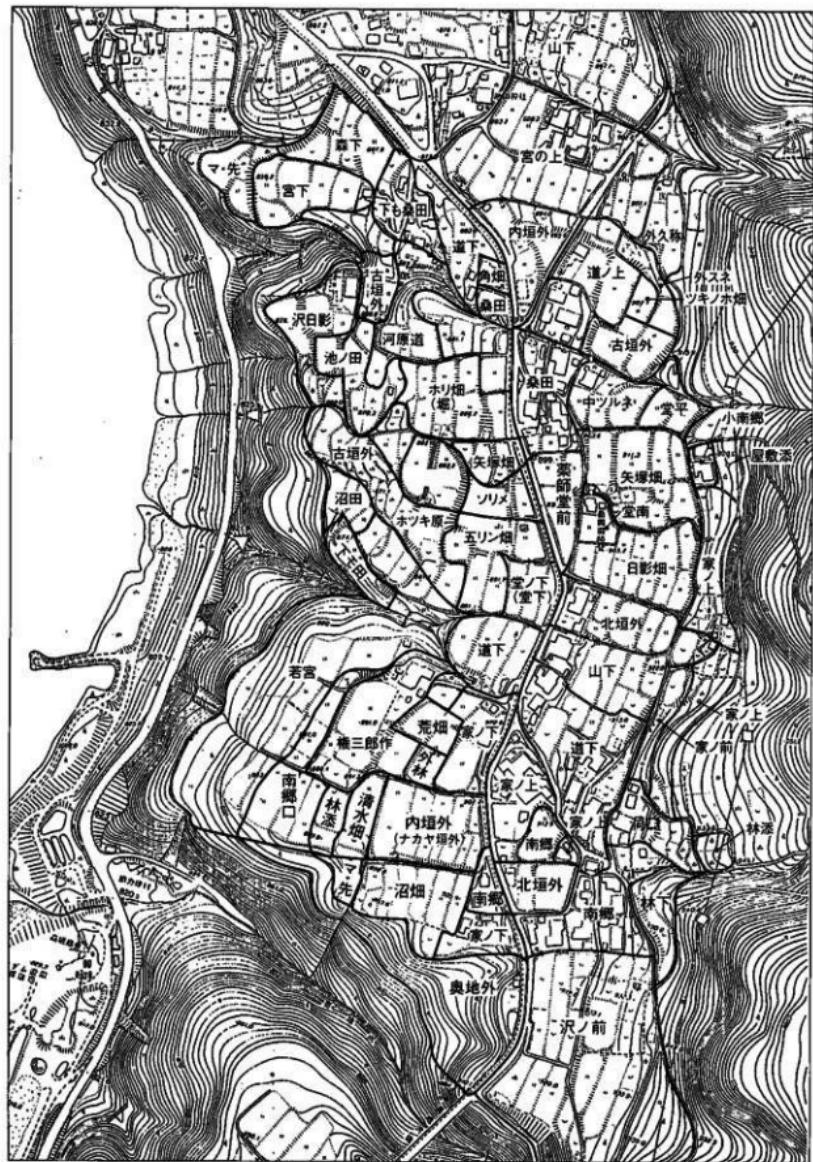
次に信仰関係では、桑田薬師堂がある。（写4）この薬師堂には平安時代には薬師像仏があったと思われるが、今は江戸時代頃の仏像に変わっている。ここ枝垂桜（数百年の老木）昭和二十三年四月長野県天然記念物として指定されている。



写3、南郷地蔵堂付近「辻」



写4、桑田薬師堂



第7圖 南嶺遺跡及び歴史的環境周辺小字名

住居址分布図

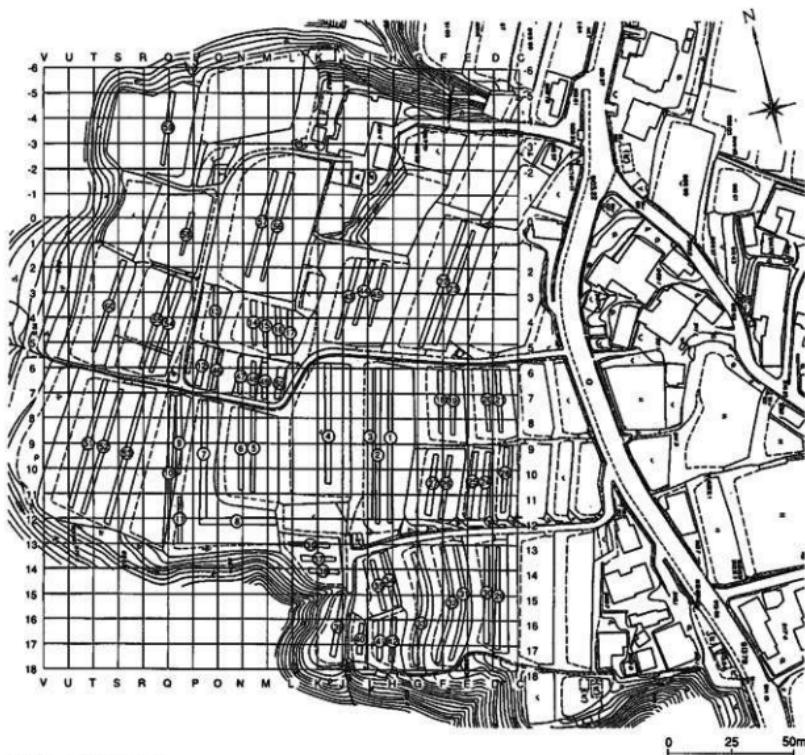


第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

今回の調査は、中山間地総合整備事業溝口地区圃場整備工事に伴う埋蔵文化財記録保存のため実施した調査である。調査は、長谷村大字溝口南郷2541番地外の水田地区が調査の対象となつた。調査は、平成11年6月1日から6月21日まで実施され、調査対象面積は25,000m²。

今回は、埋蔵している遺構の分布範囲を特定するため、事前事業としてトレンチ法を用いた試掘(第8図参照)を行い、本発掘はその結果をもとに実施された。本発掘で調査された遺構は、平安時代後葉の竪穴式住居址9軒、(第8図参照)竪穴式遺構(今回は第〇号址とした)2基、土壙6基、掘立建物址2箇所であった。また、縄文時代の土器片14点、土師器片178点、灰釉陶器片21点、須恵器片17点、土垂1点、石器類95点など総計326点の遺物を回収することができた。



第9図 調査トレンチ

第2節 遺構と遺物

第1号住居址

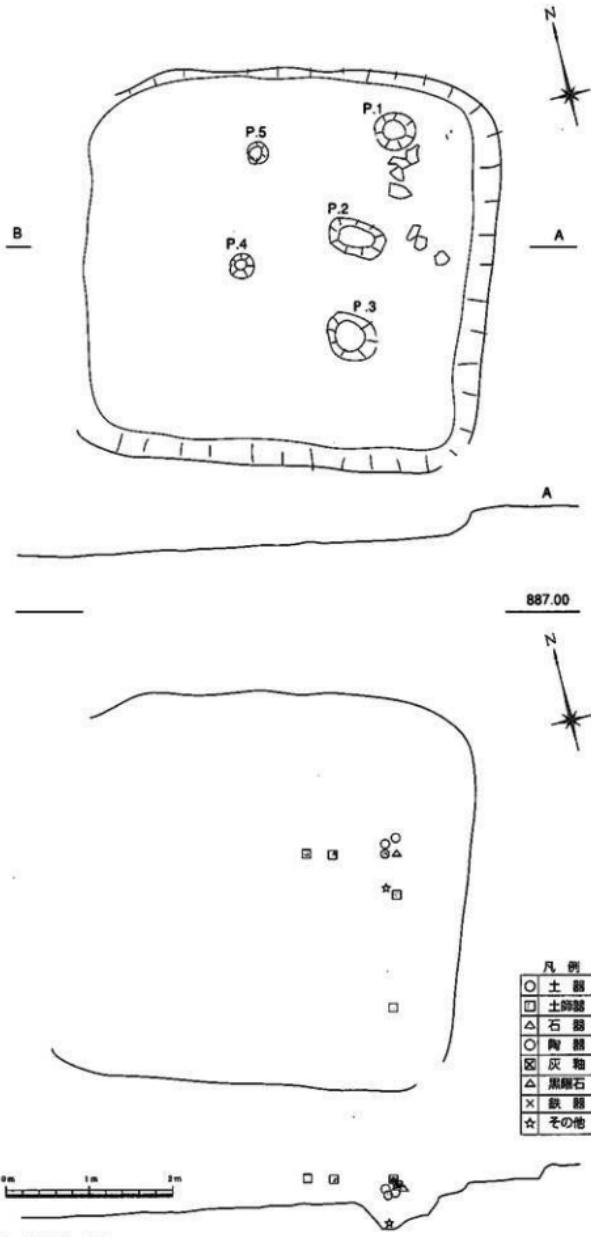
(第10図・図版1上)

本址は、調査区P-8からQ-8にわたって検出された遺構である。遺構の規模は、東西4.0m、南北3.6mを測る。本遺構は今まで行われた土地改良工事のため、約半分ほどを切り取られてしまったようである。このため、壁の高さは30cmほどしか残っていない。また、壁には特別な施設は認められなかった。床面は約半分ほどは硬く踏み固められていたが、ほかは軟弱であった。柱穴はP1・P2・P3・P4・P5と考えられるが西方は埋められていたため柱穴は認められなかつた。竪は東北の隅に設けられていた。規模は約1mほどで石芯粘土竪であった。

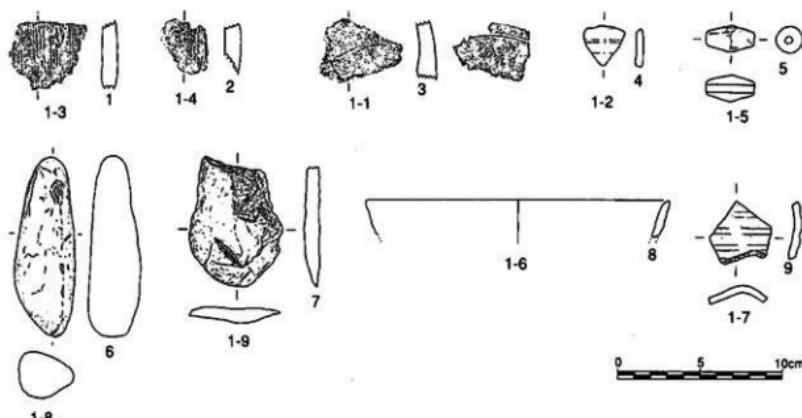
遺物

(第11図・図版11上)

1は深鉢形土器の胴部破片、文様は搔目痕。2は1と同じ搔目痕。3は深鉢形土器の破片、無文。4は器種不明の土師器。5は長さ3cm、



第10図 第1号住居址実測図・遺物分布図



第11図 第1号住居址遺物実測図

径1.6cmと小形の土垂、時代は不明。6は緑色岩の敲石、時期は不明。7は岩質不明の打製石斧、時期は不明。8は灰釉の陶器、時期は中世か。9は器形不明の磁器、大正年代か。10は木炭片、樹種不明。

第2号住居址（第12図・図版1下）

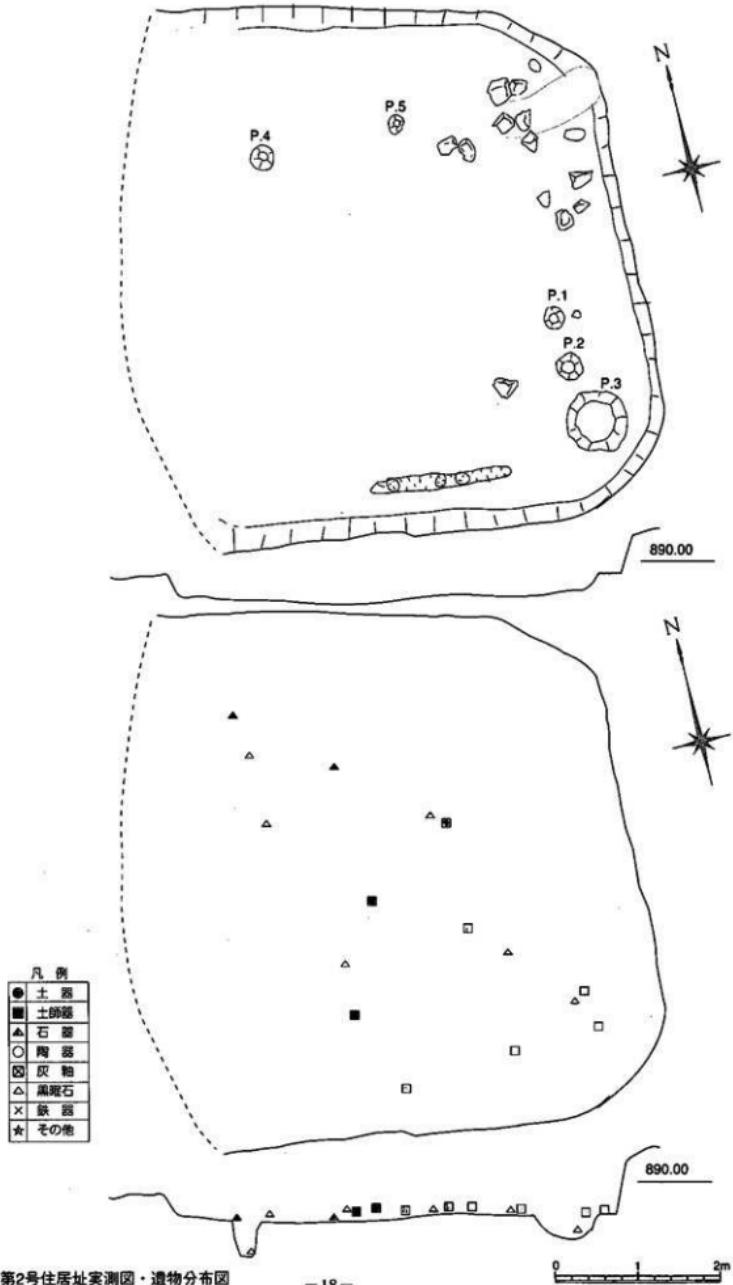
本址は、調査区N-15メッシュ内に発見された竪穴式住居址である。本址も第1号住居址と同様、今までの土地改良工事によって一部変形した形で検出された。しかし、この地区はほかの地区とは異なり畠地で残っていた場所であったため全遺構が発掘調査できた。この地点は表土より60cm~80cm掘り下げた箇所もほとんど土の動きがなく、古いテフラ層の下部に隅丸方形の床面が検出された。規模は、南北6m、東西5.5mを測るが南壁に一部周溝と思われる遺構が認められた。しかし、西壁は埋められてしまつており確認できなかった。窓は北東の隅に設けられた石芯粘土窓である。柱穴はP3のみが主柱穴であると考えられる。その他P1・P2は補助穴、P4は位置的に考えると主柱穴と考えられるが明らかにはできなかつた。

土器（第13図・図版11下）

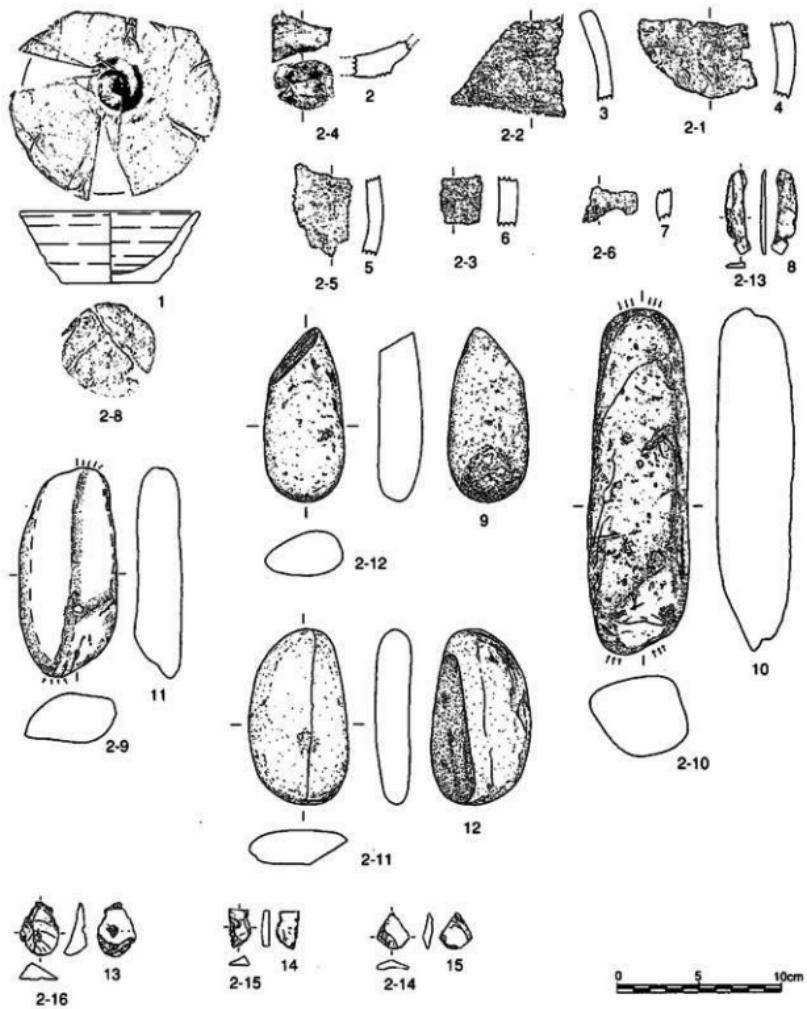
1は土師器碗、大きさは口径10.8cm、高さ4cmでロクロ目の残る平安時代の遺物。2は削り高台の土師器、平安時代と考えられる。3~7はやや厚手の土師器と思われる土器、時期は不明。

石器（第13図・図版11下）

8は黒曜石の小型石匙。9は硬砂岩の敲石。10は緑色岩の敲石。11も10と同様の敲石。12は緑色岩の擂石。13、14、15は黒曜石の破片。



第12図 第2号住居址実測図・遺物分布図



第13図 第2号住居址遺物実測図

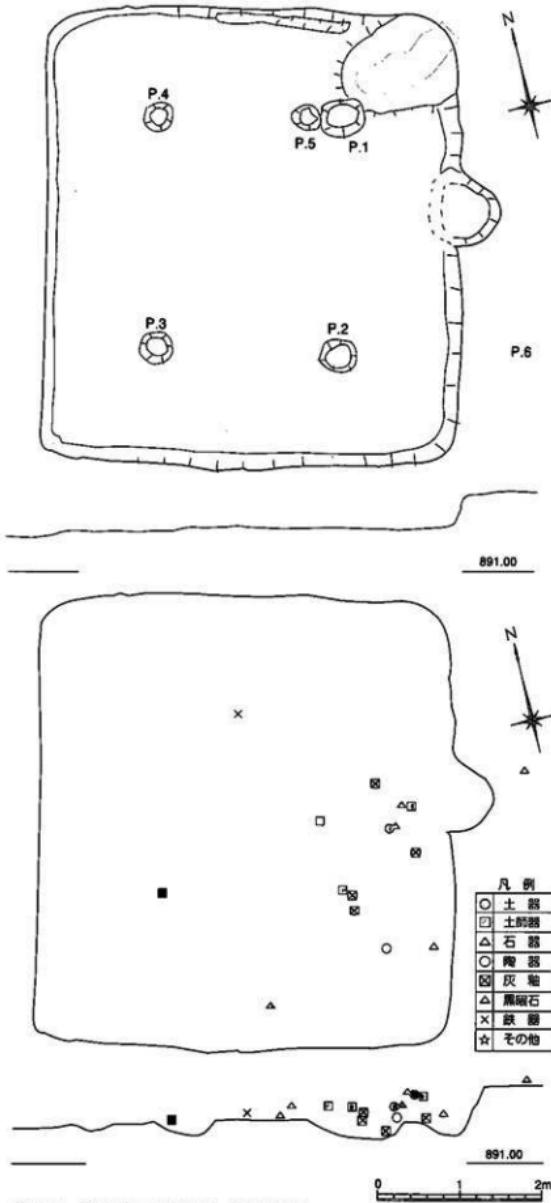
第3号住居址

(第14図・図版2上)

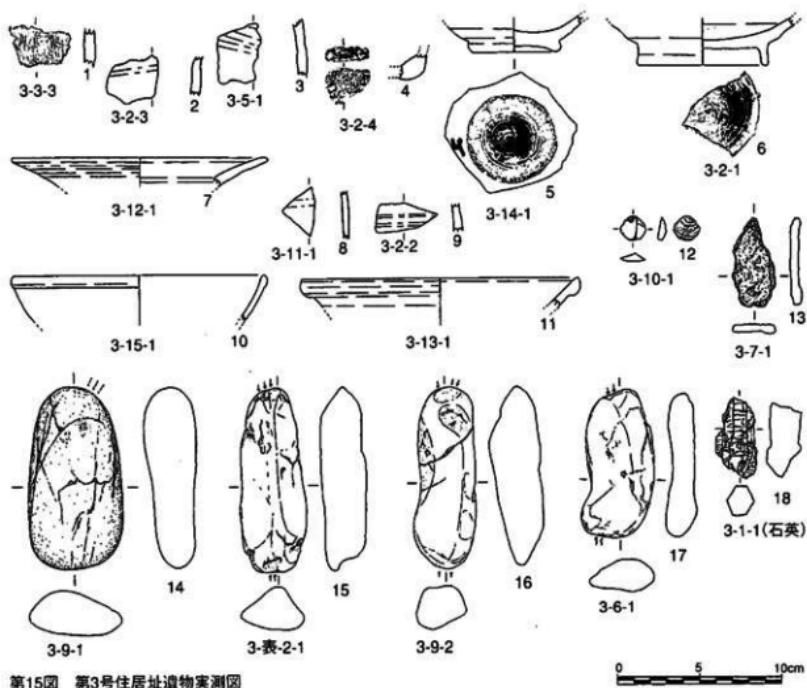
本址は、第2号住居址の東側M-5メッシュ内に発見された竪穴式住居址ではほぼ完全な形で発掘、調査することができた。本遺構は、第2号住居址と同じ立地条件である。遺構の規模は、東西5.2m、南北5.4mを測り、形状は隅丸方形の住居址である。住居址の壁は東側で80cm、南側で65cmであった。壁には特別な施設は認められなかった。床面は大方は硬く踏み固められてあったが、西側はやや軟弱なところもあった。柱穴はP1・P2・P3・P4が主柱穴で、P5は補助穴であると考えられる。竪は北東の隅に設けられていた。その規模は東西1.5m、南北1.1mの石芯粘土竪である。

遺物 (第15図・図版12上)

1は深鉢形土器の脇部破片で搔目痕がみられる。2は甕形土器口縁部で表面にロクロ痕がみられる。3は2と同じものと考えられる土器。4は土師器の底部、平安時代。5は灰釉陶器の底部。この遺物は台付灰釉陶器であるが底部近くに「上」と墨書きされている。6は灰釉陶器の底部、付高台。内面には釉がかかっている。7は灰釉陶器皿。内面釉、外面は付け釉。8は灰釉陶器ではあるが釉は見えない。9は8と同じ土器。以上は



第14図 第3号住居址実測図・遺物分布図



第15図 第3号住居址遺物実測図

平安時代の遺物である。10, 11は磁器で近世のもの。12は黒曜石の破片。13は鉄片、時代は不明。14~17は敲石。18は石英片。

第4号住居址

(第16図・図版2下)

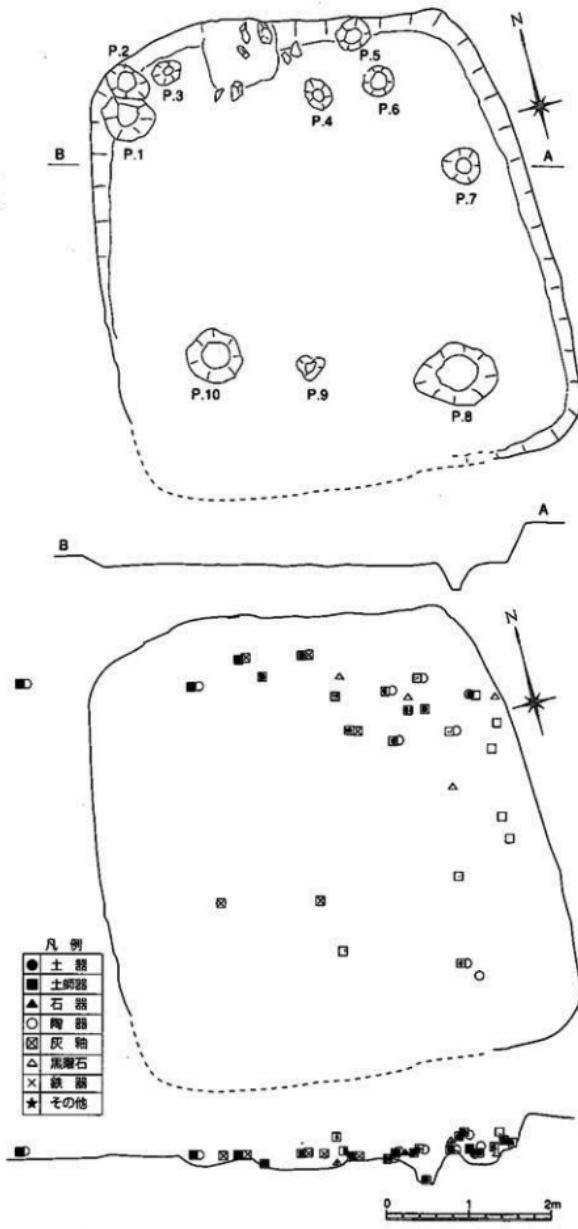
本址は、調査区M-7メッシュに検出された隅丸方形の竪穴式住居址である。この遺構も立地条件は第2、3号住居址と同じであった。規模は、東西4.75m、南北4.7mを測るが南側の壁は埋土で明らかではなかった。壁には特別の施設は認められなかったが、北西の隅に柱穴P1・P2・P3が集中していた。床は大方は硬く踏み固められていたが、南側の一部に軟弱なところがうかがわれた。また、南側には周溝ではないかと思われるところもあった。柱穴はP1・P6・P8・P10が主柱穴、P2・P3・P4・P5・P9は補助穴ではないかと考えられる。

竪は北側の中程に設けられていた石芯粘土竪である。付近には焼石や焼土が検出されており、竪内からは土師器が検出された。

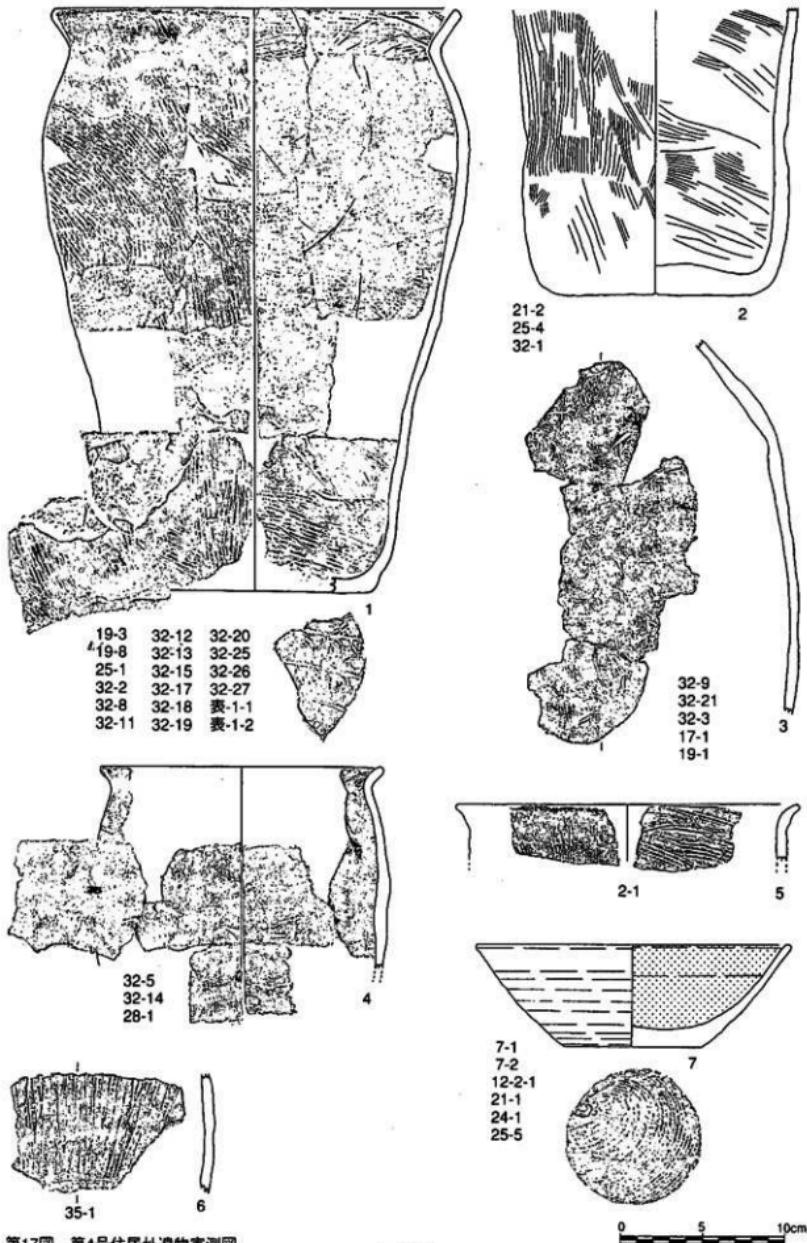
土器

(第17、18図・図版12下13上)

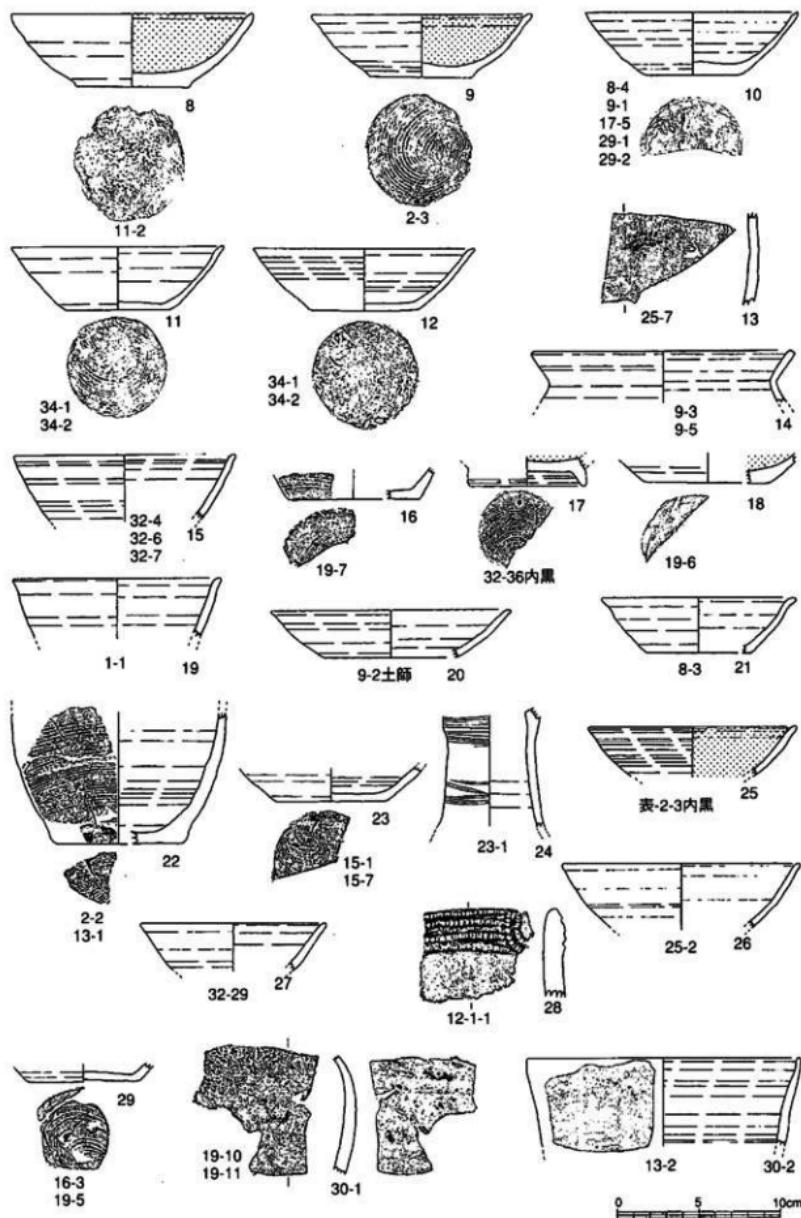
1は深鉢形土器。規模は口径25cm、高さ35cmの搔目のある土師器。2は胴部と底部だけではあるが1と同じものであると考えられる土器。3は頸部と底部を欠いた1、2と同じ土器。4は破片ではあるが搔目痕のある土器。5も同じ土器。6も搔目痕のある土器。7は口径16.8cm、高さ5cmの内黒の土師器の碗。8は口径が13cm、高さ5cmの土師



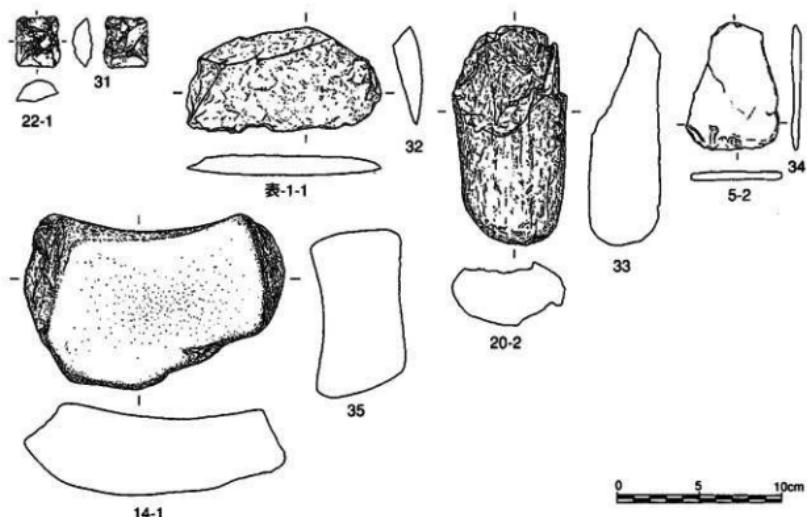
第16図 第4号住居址実測図・遺物分布図



第17図 第4号住居址遺物実測図



第18図 第4号住居址遺物実測図



第19図 第4号住居址遺物実測図

器内黒碗。9は口径13.3cm、高さ3.6cmの内黒の碗。10は口径12.5cm、高さ3.3cmの須恵器の碗。11は口径13cm、高さ3.5cmの無釉の碗。12は口径13.5cm、高さ3.5cmの無釉の土師器。13は須恵器の碗の破片。14は土師器の壺の口縁部。15は土師器の碗。16は壺の底部で文様は横なで痕の土師器。17は付高台の内黒の碗の破片。18は内黒土師器の碗か。19は無釉土師器の破片。20、21は無釉土師器の口縁部。22は16と同じ土器。23は土師器の底部。24は須恵器の壺の頸部。25は土師器内黒の碗。26、27は土師器の碗の破片。以上は平安時代の遺物。28は縄文中期の深鉢形土器の口縁部。29は糸切痕の土師器の底部。30-1、30-2は須恵器の壺、平安時代。

石器（第19図・図版13上）

31は黒曜石の破片。32は横刃型石器。33は緑色岩の蔽石。34は横刃型石器。35は硬砂岩の擂石。以上は縄文時代の遺物ではないかと思われる。

第5号住居址

(第20図・図版3上)

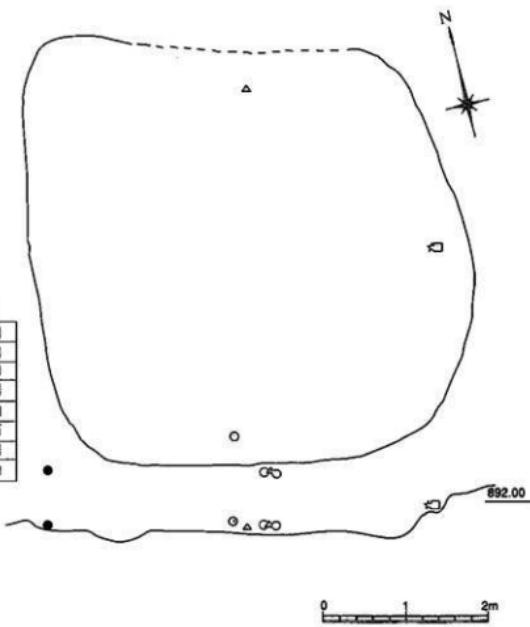
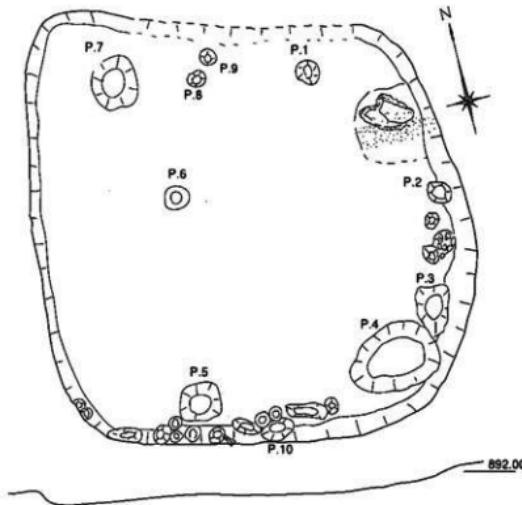
本址は、第4号住居址の東側、調査区G-3~4に発見された遺構である。この遺構は第3、4号住居址と同じ立地条件の地点で認められた。その規模は、東西5.5m、南北4.83mで隅丸方形の竪穴式住居址であった。床面より25~30cm程のところにテフラ層が検出され、その上には黒色土層があったがこの層は耕土の為よく解らなかった。南壁に10~20cm大の壁を保護したと考えられる穴が14個発見された。また、所々に周溝らしき溝も認められた。住居址の主柱穴はP.1・P.4・P.5・P.7と考えられ、その他は補助穴であると考えられる床面は大方は硬く踏み固められていた。竪は北東の壁に造られており石芯粘土竪であった。また、付近には焼土、焼石が散在していた。

土器 (第21図・図版13下)

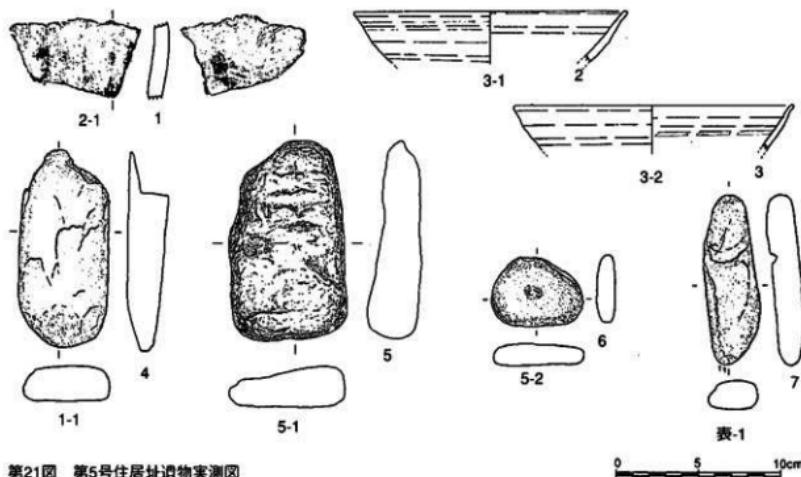
1は深鉢形土器の搔目痕のある土師器。2、3は灰釉の碗。内部に一部灰釉痕がみられる。以上3点はいずれも平安時代の遺物である。

石器

(第21図・図版13下)
4は磨製石斧。5は緑色岩の敲石。6は緑色岩の擂石。7は緑色岩の敲石。その他に栗材ではないかと思われる木炭も検出された。



第20図 第5号住居址実測図・遺物分布図



第21図 第5号住居址遺物実測図

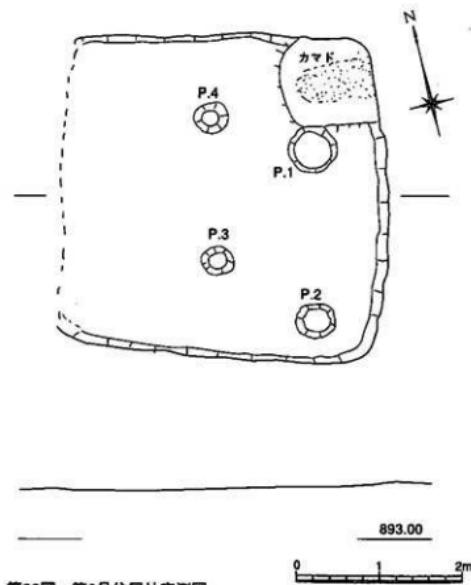
第6号住居址

(第22、23図・図版14上)

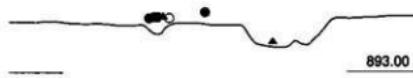
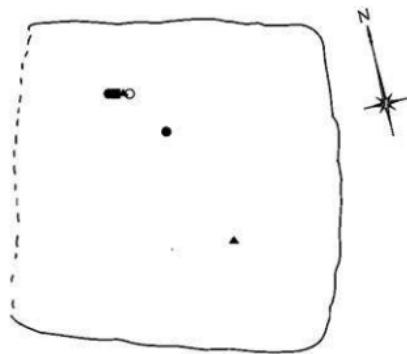
本址は、第5号住居址の東方、調査区J-6地点に検出された遺構である。ここも今までの土地改良工事のため大方は切り取られ、特に南壁は認められなかった。規模は南北3.8m、東西は約4.0mであった。壁は、テフラ層に10~15cm程切り込んで造られていた。床面は東側においては硬く踏み固められていたが、西側は半分ほど軟弱な箇所が認められた。主柱穴はP1・P2で、P3・P4は補助穴であると考えられる。本址の竈は東北の隅に設けられた石芯粘土竈であった。

遺物 (第24図・図版14上)

1は土師器の無釉の碗。2は壺形土器の胴部の破片。文様に搔目痕がみられる。1、2は平安時代の遺物である。3は碗形の陶器、呉須恵の染付で珍しい陶器片。中世か。4は麥磨岩の敲石時期不明。

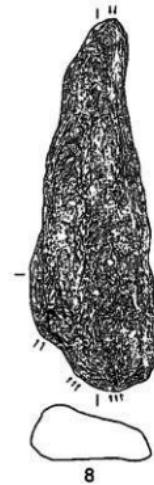
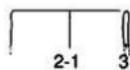
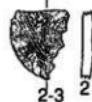
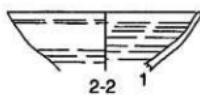


第22図 第6号住居址実測図



第23図 第6号住居址遺物分布図

0 1 2m



第24図 第6号住居址遺物実測図

0 5 10cm

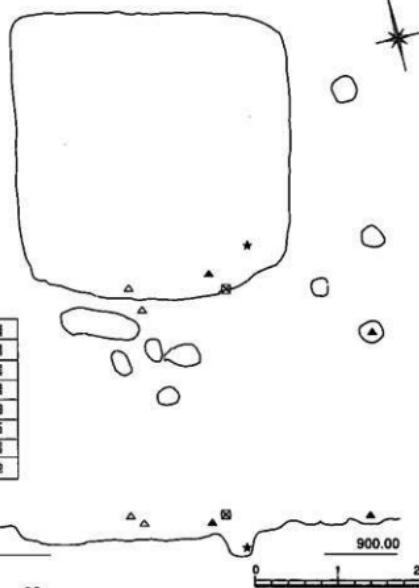
第7号住居址（第25図・図版4上）
 本址は、調査区I-10に発見された遺構である。本址も今までの土地改良工事により大方切り去られていた。遺構の規模は、東西3.8m、南北3.2mで隅丸方形の住居址であった。壁には特別の施設は認められなかつた。床面は大方は硬く踏み固められていた。柱穴はP1・P2が本址の主柱穴と考えられる。その他の小穴は使用が不明である。竪は、北東の隅に設けられた石芯粘土竪である。付近には、焼土や焼石が認められた。その他、北東側、南側に径が20~50cm、深さ10~30cmの小穴が発見された。そのうちの一部は直接住居址にかかわる補助穴ではないかと考えられる。

土器（第26図・図版14中）

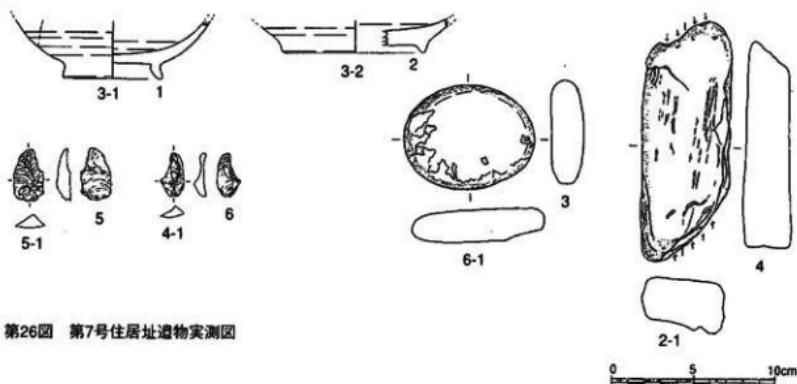
1は付高台の灰釉陶器で一部に釉がみられる陶器。2は削り高台の灰釉陶器の碗。1、2とも平安時代の遺物。

石器（第26図）

3は硬砂岩の磨石。4は岩質不明の敲石。5は古い型式の石鎌形黒曜石、5は黒曜石の破片。6は木炭片、樹種不明。



第25図 第7号住居址実測図・遺物分布図



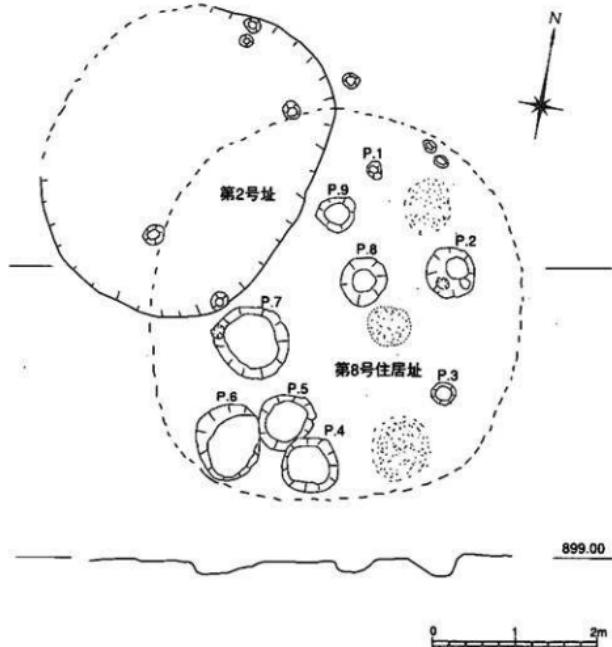
第26図 第7号住居址遺物実測図

第8号住居址

(第27・28図)

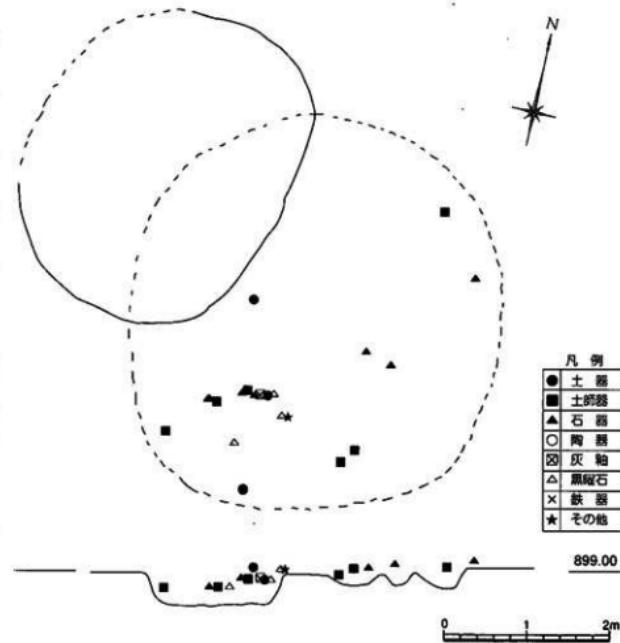
・図版4下)

本址は、調査区Ⅰ
-11メッシュに発見
された遺構である。
この住居址も今まで
の土地改良工事によ
りほとんどが切り取
られてしまっていた
遺構であるが、今回
の調査で確認できた
範囲内、規模を推測
すると、東西4.4m、
南北4.8mの楕円形
の竪穴式住居であっ
たと思われる。住居
址内には多くのビッ
トが認められた。そ
のビットを個々に実
測した結果、P1は
外径20cm、内径10cm、
深さ12cm、P2は外
径60cm、内径30cm、
深さ29cm、P3は外
径35cm、内径16cm、
深さ14cm、P4は外



第27図 第8号住居址実測図

径60cm、内径40cm、深さ30cm、P.5は外径50cm、内径35cm、深さ25cm、P.6は外径85cm、内径75cm、深さ28cm、P.7は外径85cm、内径25cm、深さ18cm、P.9は外径45cm、内径25cm、深さ18cmを測る。本址の主柱穴、床面は確認できなかった。本址の炉址と思われる付近に焼土、焼石が認められたが調査の段階では、この地点を住居址の炉であると断定することはできなかった。また、本址を第2号址が切り込んでいる。



第28図 第8号住居址遺物分布図

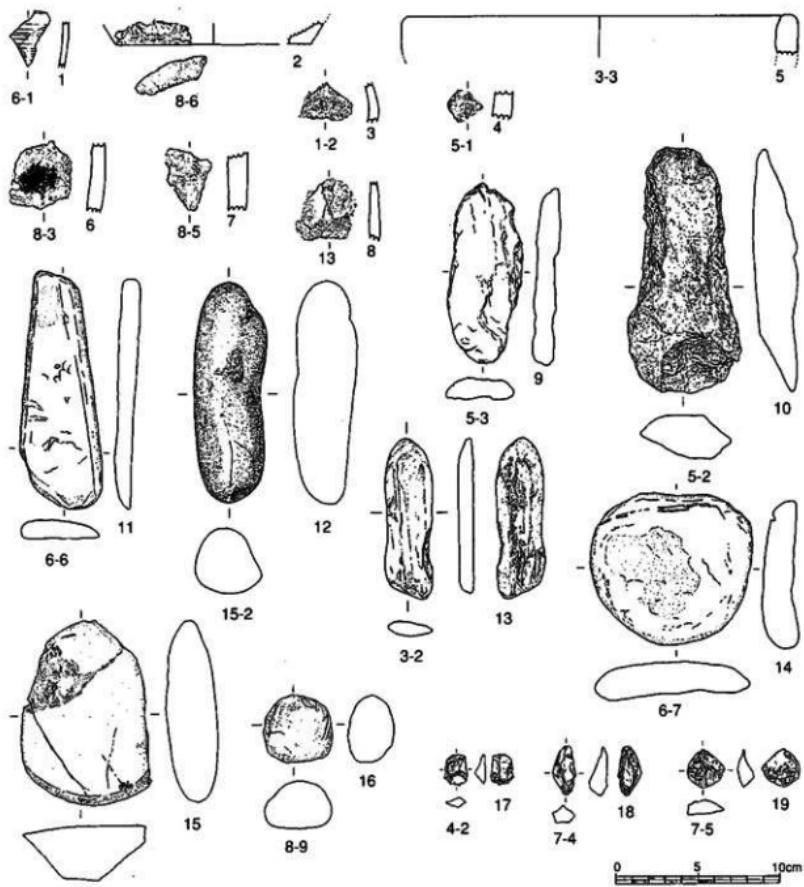
土器

(第29図・図版14下)

1は灰釉陶器の破片。ロクロ目と一部に灰釉がみられる。2は土師器の底部で削り痕がみられるもの。3～7はやや厚手の土師器と考えられる土器。8は土師器。以上は平安時代の遺物である。

石器 (第29図・図版14下)

9、10は打製石斧。11は半磨製石斧。12は敲石。13は横刃形石器。14、15は磨石。16は石灰岩の投弾。17、18、19は黒曜石。



第29図 第8号住居址遺物実測図

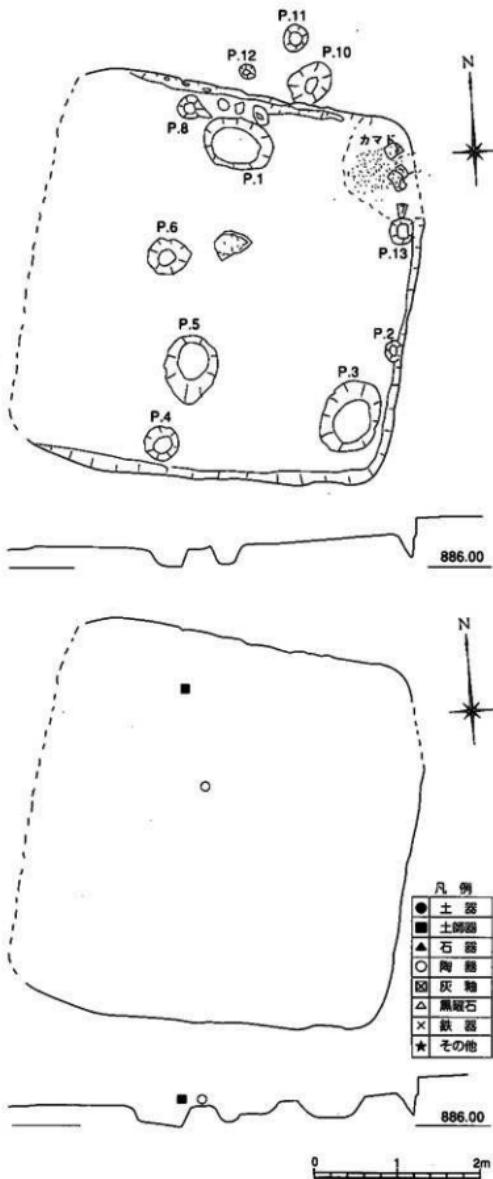
第9号住居址

(第30図・図版5上)

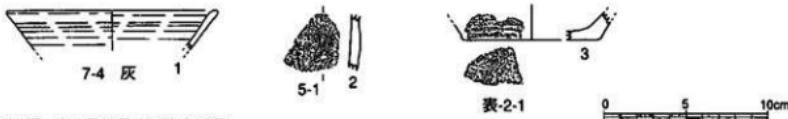
本址は、調査区Q-2に発見された遺構である。この遺構は今までの土地改良工事によりほとんど切り取られ、北側と西側の一部に壁が10cm内外残っていただけであった。本址の規模は、南北4.5m、東西4.5mの隅丸方形の竪穴式の住居址である。床面は大方は硬く踏み固められていたが、一部軟弱なところもみられた。本址の主柱穴はP1とP5で他は補助穴であると思われる。また、P3に添った壁に、周溝と考えられる長さ115cm、巾15cm、深さ10cmの溝が検出された。本址の炉址は住居址の南西の隅に発見され、形態から石芯粘土窯であると考えられる。窯の内部から焼土と焼石が検出された。

遺物 (第31図・図版15上)

1は碗形の須恵器。2は壺形土器
搔目痕の土師器。3は糸切底、土師器の破片。以上三点は平安時代の遺物である。



第30図 第9号住居址実測図・遺物分布図



第31図 第9号住居址遺物実測図

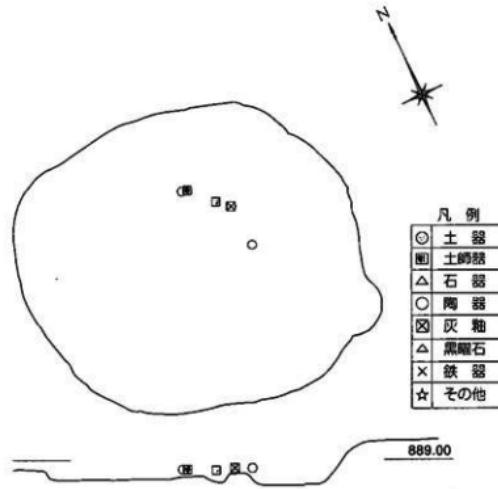
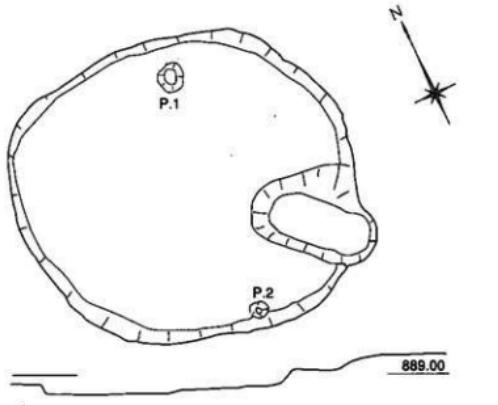
第1号址

(第32図・図版5下)

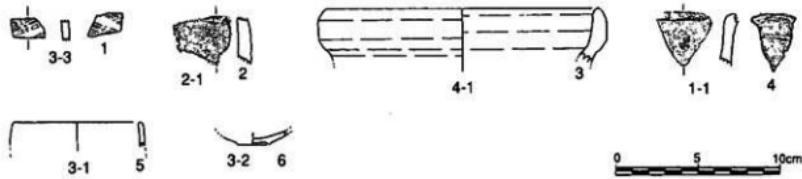
本址は、第2、3、4、5号住居址と地形的には同じ箇所に発見された遺構である。調査区画はQ-7で、本址の規模は東西2.8m、南北2.6mの梢円形をなしている。この遺構内には後世掘られたと思われる東西1.2m、南北1.0mの梢円形の土壙が確認された。ピットはP1とP2の2箇所が確認されたが、これが柱穴であるとは考えにくい。

遺物 (第33図・図版15中)

1は灰釉陶器の碗、平安時代後半。2は土師器の壺の破片、平安時代。3は壺形の陶器、中世。4は壺形の陶器、中世前半。5は灰釉陶器の碗の口縁部、中世末期。6は灰釉陶器の皿の破片、近世のもの。



第32図 第1号址実測図・遺物分布図

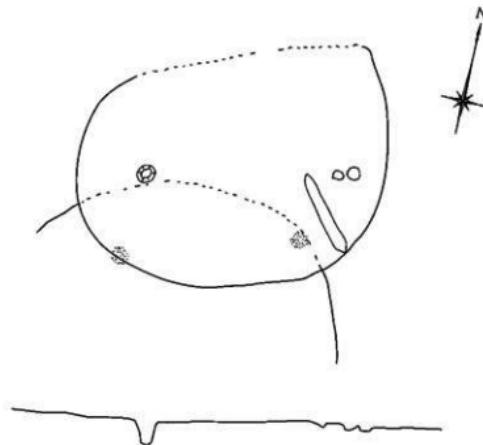


第33図 第1号址遺物実測図

第2号址

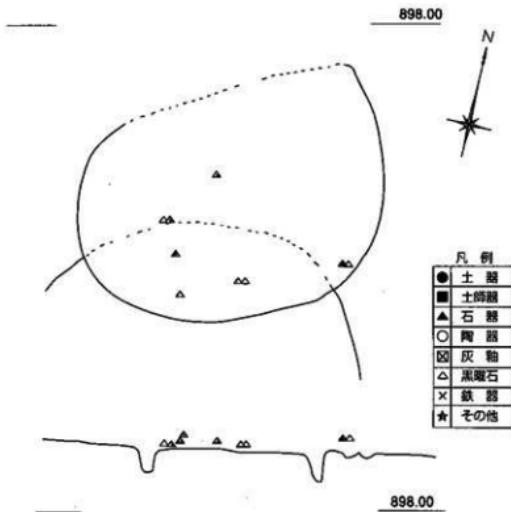
(第34図・図版6上)

本址は、調査区F-10地点に発見された遺構である。この遺構は、第8号住居址を更に切る形で検出された。遺構の規模は、南北4.0 mを測るが、東西は切り取られてしまったため計測できなかった。また、床面も確認できなかった。ピットは4箇所確認できたが、これらを柱穴と判断することはできなかった。

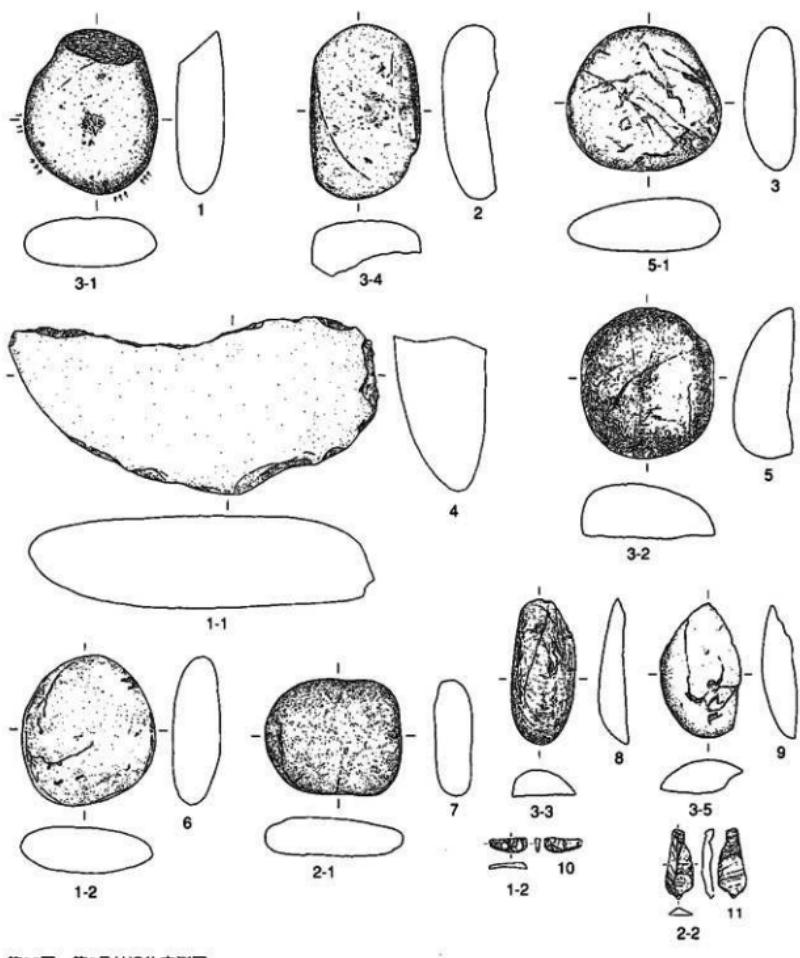


石器 (第35図・図版15下)

1は硬砂岩の磨石。2は硬砂岩の磨石。3は硬砂岩の磨石。4は硬砂岩の磨石。5は硬砂岩の磨石。6は緑色岩の磨石。7は硬砂岩の磨石、大きさは直径26cm厚さ7.5cmの大型のもの。8は硬砂岩の叩石。9は硬砂岩の叩石。10は黒曜石の横刃。11は黒曜石の石匙。1から11まで使用時期については不明。



第34図 第2号址実測図・遺物分布図

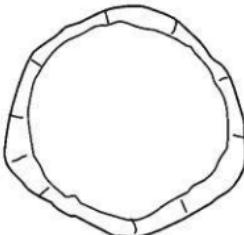


第35図 第2号址遺物実測図

第1号竪穴址

(第36図・図版6下)

本址は、調査メッシュO-9に発見された竪穴遺構である。規模は、東西1.6m、南北1.6m、深さは0.3mであった。

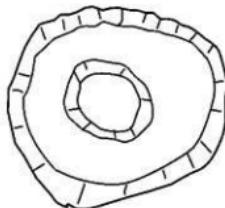


1/40

第2号竪穴址

(第36図・図版7上)

本址は、調査メッシュJ-12に発見された遺構である。規模は、径が155cm、深さ17cmを測る。また、遺構内に径50cm、深さ25cmの小ビットが認められた。



1/40

第36図 上、第1号竪穴址実測図 下、第2号竪穴址実測図

第3号竪穴址

(第37図・図版7下)

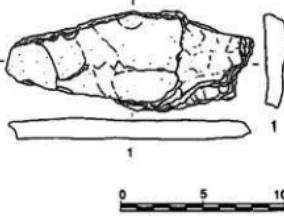
本址は、調査区F-12メッシュ内に発見された竪穴である。規模は、東西1.2m、南北1.3m、深さ73cmを測る。この遺構内には自然石が固まって存在していたが、この石は開田工事中に穴を埋めるために入れたものであると思われる。

石器 (第37図・図版16上)

1は粘盤岩の打製石斧。



1/40



第37図 左、第3号竪穴址実測図 右、第3号竪穴址石器実測図

第1土壤（第38図・図版8上）

南郷遺跡から検出された土壤は全部で6つを数え、第1土壤はP-9地区に発見された。規模は、東西1.2m、南北70cm、深さ30cmの梢円形の土壤である。



1/40

第38図 第1土壤実測図

第2土壤（第39図・図版8下）

本遺構は、調査区P-10区画に発見された。遺構の規模は、東西2.3m、南北75cm、深さ30cmの梢円形の遺構である。



1/40

第39図 第2土壤実測図

第3土壤（第40図・図版9上）

本遺構は、調査区P-10~11にかけて検出された遺構である。規模は、東西1.2m、南北75cm、深さ30cmの遺構である。

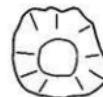


1/40

第40図 第3土壤実測図

第4土壤（第41図・図版9下）

本遺構は、調査区P-7メッシュ内に発見された遺構である。その規模は、東西1.1m、南北90cm、深さ24cmの梢円形の遺構である。

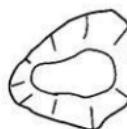


1/40

第41図 第4土壤実測図

第5土壤（第42図）

本遺構は、調査区M-6メッシュに発見された遺構である。その規模は、東西2.0m、南北1.2m、深さ52cmの梢円形の遺構である。

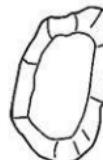


1/40

第42図 第5土壤実測図

第6土壤（第43図）

本遺構は、調査区M-7メッシュに発見された遺構である。その規模は、東西1.4m、南北80cm、深さ50cmの梢円形の遺構である。



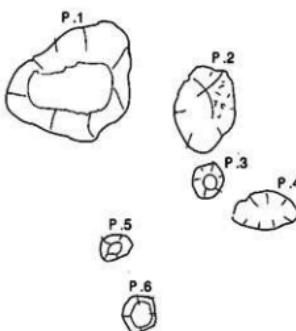
1/40

第43図 第6土壤実測図

第1ピット郡

(第44図・図版10上)

本址は、調査区P-8~9にわ
たって発見された。ピット郡は今
のところ、堀立建物址とは考えら
れない。



第44図 第1ピット郡実測図

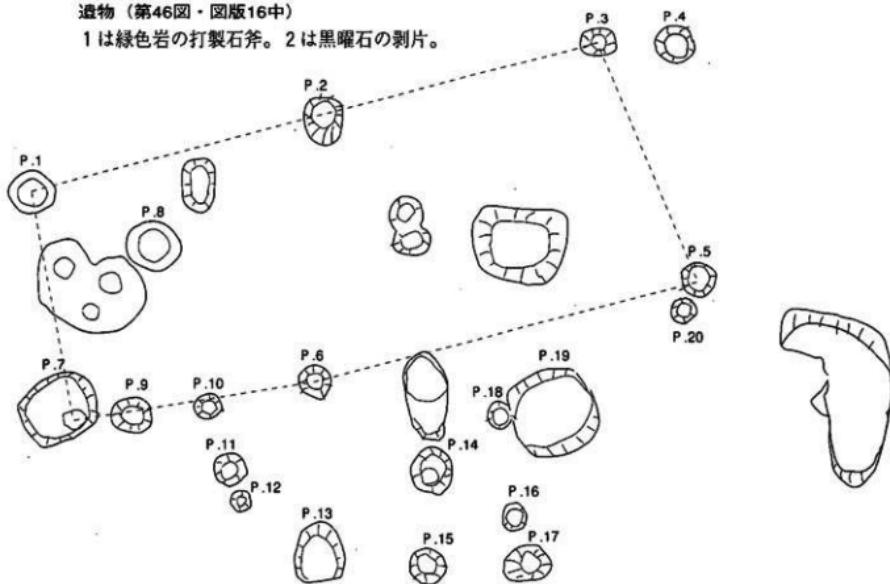
1/40

第2号堀立建物址 (第45図・図版10下)

本址は、調査区画D-11に発見されたピット郡である。このピット郡の内にP.1~P.2間は2.4m、
P.2~P.3は2.4m、P.3とP.5間は2m、P.5とP.6は3m、P.6~P.7は2m、P.7~P.1は1.9mを測る。
以上は堀立建物址と考えられるが、他のピットは、建物址としては考えられない。

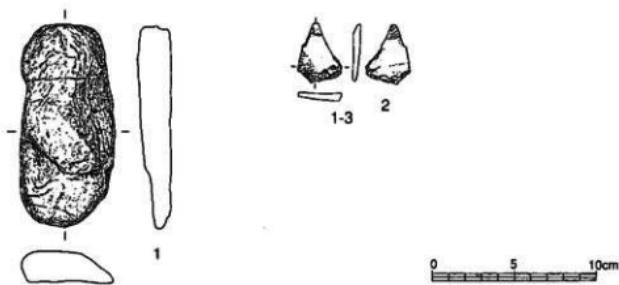
遺物 (第46図・図版16中)

1は緑色岩の打製石斧。2は黒曜石の剥片。



第45図 第2号堀立建物址実測図

1/40



第46図 第2号堀立建物址石器実測図

トレンチ調査

今回の発掘調査をはじめるにあたりトレンチ法を用いて遺構分布の範囲を特定する作業を行った。調査対象範囲に巾2mのトレンチを60本あけNo.2、No.7、No.12、No.15、No.26、No.37、No.38トレンチから計31個の遺物を回収できた。

土器（第47図・図版16下）

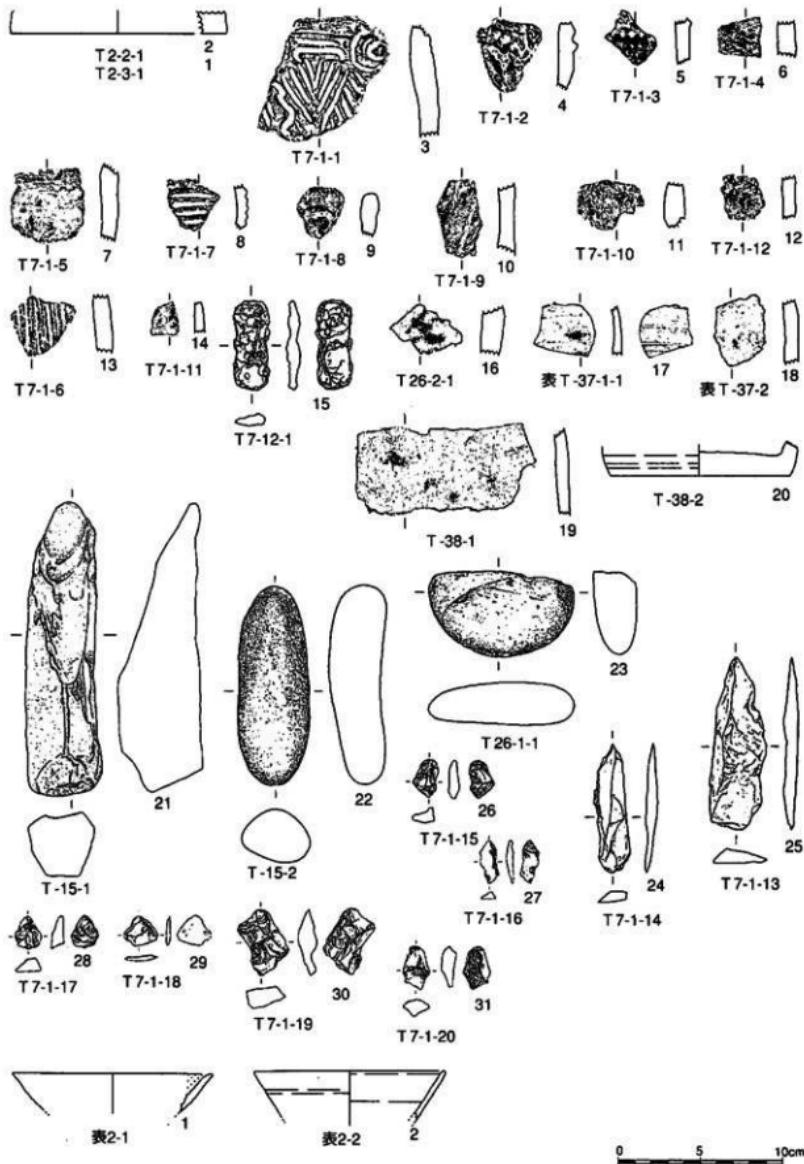
1、2は壺形土器の破片、平安時代（第2トレンチ）。3は縄文中期後葉曾利Ⅲ式。4は曾利Ⅰ式。5は曾利Ⅱ式。6は曾利Ⅰ式。7、8、9、10は曾利Ⅱ式。11、12、13は曾利Ⅲ式。3～13は縄文中期後葉の遺物。14は土師器、平安時代（以上第7トレンチ）。15は鉄片で時期は不明（第12トレンチ）。16は土師器で時期は不明（第26トレンチ）。17は灰釉の碗、平安時代。18は土師器、平安時代（第37トレンチ）。19は土師器、平安時代。20は土師器壺の底部、平安時代（第38トレンチ）。

石器（第47図・図版16下）

21は硬砂岩の敲石。22は緑色岩の敲石。23は硬砂岩の磨石。24は緑色岩の横刃型石器。25は硬砂岩の横刃型石器。26、27、28、29、30、31は黒曜石の破片（以上第15トレンチ）。

表面採取遺物（第47図・図版16中）

1は土師器内黒の碗、平安時代。2は須恵器の碗の破片、平安時代。



第47図 トレンチ調査遺物実測図・表面採取遺物実測図

まとめ

中山間地域総合整備事業溝口地区圃場整備工事にあたり当該地区にある南郷遺跡が消滅してしまう恐れがあるため、平成11年6月1日より6月21日まで3週間にわたり緊急発掘調査を実施した。その結果を要約すれば以下のとおりである。

1. 本発掘事業は長谷村大字溝口2463番地ほか25,000m²を実施した。

2. 発見された遺構は以下のとおりである。

平安時代後葉の竪穴式住居址	9軒
様式不明の竪穴式住居址	2軒
掘立建物址	2基
竪穴址	3基
土壙	6基

3. 検出された遺物は以下のとおりである。

縄文中期中葉の土器	14点
土師器	178点
灰釉陶器	21点
須恵器	17点
石器	54点
その他（黒曜石破片など）	42点

遺物合計 326点

南郷遺跡は溝口地区と黒河内地区の境に存在する遺跡で、縄文時代中期後葉と平安時代の複合遺跡である。本遺跡は遺物の分布状況より南北200m、東西150mの範囲であると考えられる。残念ながら今までに行なわれた改田工事の際に、多くの遺構が壊されてしまったようである。

今回は住居址遺構のほかに巾1.5m、高さ2.5mの人工的に造られたと思われる堀が検出された。堀の下面には砂礫が広がっていたがこれは自然現象により堆積したものと考えられる。今回の調査ではこの堀が、いつ何のために造られたものであるかは明らかにすることはできなかった。

また今回の調査後、特に疑問になった点として、平安時代の村が消えてしまったことがあげられる。本遺跡では鎌倉以後の遺物を1点も検出することができず、南郷に存在していたはずの集落は、何の手掛かりも残さず消えてしまったのである。現在の南郷部落は、発掘調査地の東側（村道の東側山付け）にある。ここには、平安から中世にかけての薬師堂や地蔵堂が存在し、地域住民によって今なお大切に管理されている。かつて存在していた集落がどのような歴史をたどって今の部落に繋がってきたのか、今後地域史を研究するうえでたいへん大きな課題がなげかけられた。

＜南郷遺跡発掘調査、遺物整理にご協力を賜った方々について＞

今回の発掘調査におきましては、東部建設の社長をはじめ、重機のオペレーターを務めてくださった方々には発掘当初より埋め戻しにいたるまで丁寧な作業を心掛けてくださいありがとうございました。峰コンサルの保科さん、赤羽さんには細かい指示にも対応していただき心より感謝

申し上げます。高遠町よりご足労願った奥田静子さん、唐沢春恵さん、鈴木和恵さんには図版作成、報告書作成の手順をわかりやすくご指導賜りました。同じく高遠町の鈴木岬さんには、遺物の復元を通して古代のロマンを教えていただきました。写真図版作成におきましては、宮田村の宮田カメラさんに何度もご無理を聞いていただきありがとうございました。また、高遠町歴史博物館館長の中村文彦さん、伊那市教育委員会の飯塚政美先生、高遠町教育委員会の伊沢紹次さんには多くのご意見、ご指導をいただき心より感謝申し上げます。

最後に多くの方々のご尽力を賜り南郷遺跡発掘調査を無事終えられたこと、ならびに報告書の刊行ができましたことに改めて厚く御礼申し上げます。

<参考文献>

- | | | |
|------|----------------|-----------------------|
| 1921 | 鳥居龍藏 | 「先史及原始時代の上伊那」 |
| 1956 | 信濃史料刊行会 | 「信濃史料 1巻上下」 |
| 1965 | 林 茂樹 | 「上伊那郡誌 2巻」 |
| 1978 | 友野良一・赤羽義洋 | 「どるめん 12号」 |
| 1982 | 笹沢 活 | 「中央道埋文報告書」原村 その5 |
| | 樋口昇一 | 「中央道埋文」諏訪市 |
| 1989 | 宮下健司 | 「埋文土器 大観 1」 |
| 1977 | 増子康真 | 「いわゆるおせんべ土器 信濃Ⅲ29」 |
| 1979 | 江坂輝弥 | 「埋文土器編年 世界考古学事典 上巻4号」 |
| 1990 | 「日本地名辞典 (長野県)」 | 角川書店 |
| 1997 | 「日本土器事典」 | 大川 清・鈴木公雄・工楽善通・雄山 関 |
| 1997 | 「伊那谷の自然」 | 建設省中部地方建設局天竜川上流事務所 |
| 1983 | 「高遠町誌 上巻歴史」 | 高遠町誌刊行会 |
| 1995 | 「宮田村誌 資料欄」 | 宮田村 |

南郷跡発掘調査遺物一覧表

No.1

遺構 No.	通 物 No.	博 物 図 No.	現 在 地 點 名	調 査 文 字	古 代 土 器	中 世 石 器	後 期 鐵 器	近 世 鐵 器	そ の 他	備 考	遺構 No.	通 物 No.	博 物 図 No.	現 在 地 點 名	調 査 文 字	古 代 土 器	中 世 石 器	後 期 鐵 器	近 世 鐵 器	そ の 他	備 考
1	1	11	11	○				○		平安	4	7-2				○					平安(内黒)
	2	11	11	○				○		*		3				○					*
	3	11	11	○				○		(東)		5				○					*
	4	11	11	○				○		平安	6				○						
	5	11	11	○						土器	7				○						
	6	11	11	○						陶器	8				○						
	7	11	11	○						*	9				○						
	8	11		○						敲石	8-1				○					變、かき目	
	9	11		○							2				○						
	10									木炭	3	18	13		○					平安(無輪)	
2	1	13	11	○				○		平安(變)	4				○					平安	
	2	13	11	○				○		*	9-1				○					*	
	3	13	11	○				○		*	2	18	13		○					平安(無輪)	
	4	13	11	○				○		平安	3	18	12		○					平安	
	5	13	11	○				○		*	4				○					變	
	6	13	11	○				○		*	5	18	12		○					平安(盜)	
	7			○				○		*	6				○						
	8			○				○		*	7				○						
	9	13	11	○						敲石	10-1				○						
	10	13	11	○						*	11-1'				○					平安(無輪)	
	11	13	11	○						*	2				○					平安(内黒)	
	12	13	11							*	12-1				○						
	13	13	11							○ 厚壁石(純文)	2				○						
	14	13	11							*	3				○						
	15	13	11							*	4				○						
	16	13	11							*	5				○						
3	1-1	15	12							○ 石英	6				○						
	2-1	15		○						付高台、櫛戸	12-1-1	18		○			○			深鉢	
	2	15	12	○				○		平安	2-1				○					平安(内黒)	
	3	15	12	○				○		奈良、平安	2				○					*	
	4	15	12	○				○		*	13-1	18	13		○					平安(盜)、かき目	
3-1											2	18	13		○					平安(盜)	
	2										14-1	18	13	○						壁打(せいけい)	
	3	15	12	○				○		かき目	15-1	18	12		○					平安(希切底)	
	4-1									奈良、平安	2				○					内黒	
	5-1	15	12	○						平安	3				○						
	2									*	4				○						
	6-1	15	12	○						叩石	5				○					内黒	
	7-1	15	12							○ 鉄片	6				○					*	
	8-1			○				C			7	18	12		○					平安	
	9-1	15	12	○						叩石	8				○					炎	
	2	15	12	○						*	16-1				○						
	10-1	15	12							○ 厚壁石	2				○						
	11-1	15	12	○							3	18	13		○					平安(希切底)	
	12-1	15	12	○							5				○						
	13-1	15	12	○						陶器	17-1	17	12		○					平安(變、かき目)	
	14-1	15	12	○						平安(亂骨)	2				○						
	15-1	15	12	○						宝町(沟唇)	3				○						
	表1-1			○						叩石	4				○					無輪	
	2										5				○					平安	
	表2-1	15	12	○						叩石	19-1	17	12		○					平安(變、かき目)	
4	1-1	18	13	○						平安(無輪)	2				○						
	2-1	17	12	○						平安(變、かき目)	3	17			○						
	2	18	13	○						平安(器皿)	4				○						
	3			○						平安(内黒)	5	18	13		○						
	4-1			○							6	18	12		○					平安(内黒)	
	5-2	18		○						横刀	7	17	12		○					平安(かき目)	
	6-1			○							8	17			○						
	7-1			○						平安(内黒)	9				○						
											10	18	13		○					平安(變)	

通 構 物 No.	通 構 物 No.	傳 播 圖 No.	古 土 石 器 器 類	馬 銅 前 初 中 後 鐵 器 類	文 中 明 後 鐵 器 類	古 土 須 器 器 類	代 灰 器 類	中 灰 器 類	近 世 灰 器 類	そ の 他		通 構 物 No.	傳 播 圖 No.	古 土 石 器 器 類	馬 銅 前 初 中 後 鐵 器 類	文 中 明 後 鐵 器 類	古 土 須 器 器 類	代 灰 器 類	中 灰 器 類	近 世 灰 器 類	そ の 他	備 考		
4	19-11	18	13	○				○				平安(要)	4	32-32	○					○				
20-1			○									璇石	33	○					○					
2	18		○					○				タ	34	○					○					
21-1			○					○				平安(内黒)	35	○					○					
2	17	12	○					○				平安(要,かき目)	36	18	13	○			○				手鏡(内黒,竹台)	
22-1	18							○				黒曜石	37	○				○				無輪		
23-1	18	13	○					○				平安(竹高台)	38	○				○				*		
2		○						○				平安(要)	34-1	○				○				平安(無輪)		
3		○						○				平安(要)	2	○				○				*		
24-1		○						○				平安(内黒)	35-1	17	12	○			○				平安(要,かき目)	
25-1	17		○					○				平安	2	○				○				*		
2	18	13	○					○				*	3	○				○				平安(要)		
3		○						○				平安(要,かき目)	表-I-1	18		○							鏡刀	
4	17	12	○					○				平安(要,かき目)	2-2	○				○				かき目		
5		○						○				平安(内黒)	3	18	13	○			○				平安(内黒)	
6		○						○				平安	4	○				○						
7	18	13	○					○				平安	5	○				○						
8		○						○					5	1-1	21	13	○					磨製石斧		
9		○						○					2-1	21	13	○					毛良,平安(深井)			
10		○						○					2								木炭			
26-1		○						○					3-1	21	13	○					平安			
27-1		○						○				かき目	2	21	13	○					*			
2		○						○				無輪	4-1	○								陶器		
3		○						○				かき目	2	○								染付		
28-1	17		○					○				平安(要,かき目)	3	○								磁器		
29-1		○						○				平安	4	○								墨石(ナリイシ)		
2		○						○				*	5-1	21	13	○					璇石			
30-1		○						○				要,かき目	2	21	13	○					筒石			
31-1								○				*	表-I-1	21	13	○					叩石			
32-1	17	12	○					○				平安(要,かき目)	6	2-1	24	14	○					中畫(吳須須)		
2	17		○					○				平安(要)	2	24	14	○					平安(無輪)			
3	17	12	○					○				平安(要,かき目)	3	24	14	○					平安(要,かき目)			
4	18	12	○					○				平安	4	○							陶器			
5	17		○					○				平安(要,かき目)	8	24		○					璇石			
6	18	12	○					○				平安	7	1-1								炭石		
7	18	12	○					○				平安	2-1	26		○					炭石			
8	17		○					○				平安(かき目)	3-1	26		○					平安(竹高台)			
9	17	12	○					○				平安(要,かき目)	2	26	14	○					平安			
10			○					○				かき目	3	○							*			
11	17		○					○				平安(かき目)	4-1	26		○					鼠尾石			
12	17		○					○				*	5-1	26		○					黑曜石(墨) 墨石(墨石墨)			
13	17		○					○				*	6-1	26	14	○					磨石			
14	17		○					○				平安(要,かき目)	8	1-2	29	14	○					平安		
15	17		○					○				平安(かき目)	2-2	○										
16			○					○				平安(かき目)	3	○										
17	17		○					○				平安(かき目)	3-2	29	14	○					鏡刀			
18	17		○					○				*	3	29	14	○					平安			
19	17		○					○				*	4-2	29	14						黑曜石			
20	17		○					○				*	5-1	29	14	○					平安			
21	17	12	○					○				平安(要,かき目)	2	29	14	○					打製石斧			
22		○						○				かき目	3	29	14	○					*			
23		○						○				*	6-1	29	14	○					平安			
24			○					○				平安	2	○							陶器			
25	17	○						○				平安(かき目)	4								○ 黑曜石			
26	17		○					○				*	5								○ *			
27	17		○					○				平安(要)	6	29	14	○					半磨製石斧			
28			○					○				かき目	7	29	14	○					磨石			
29	18	12	○					○				平安(要)	8	○							*			
30		○						○				底部	7-4	29	14						○ 黑曜石			
31		○						○				平安	5	29	14						*			

図 版

図版1



第1号住居址



2第号住居址

图版2



第3号住居址



第4号住居址

図版3



第5号住居址



第6号住居址

図版4



第7号住居址



第8号住居址

図版5



第9号住居址



第1号址

図版6



第2号址

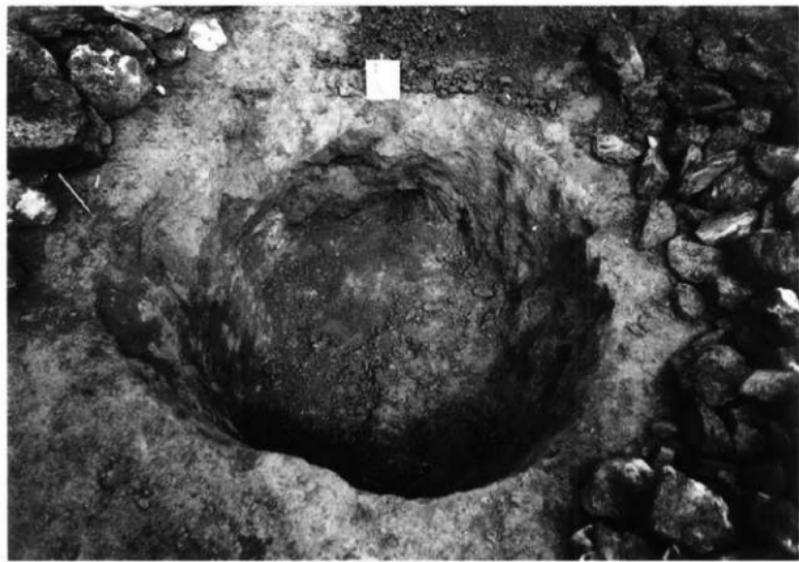


第1号整穴址

図版7



第2号竪穴址



第3号竪穴址

図版8



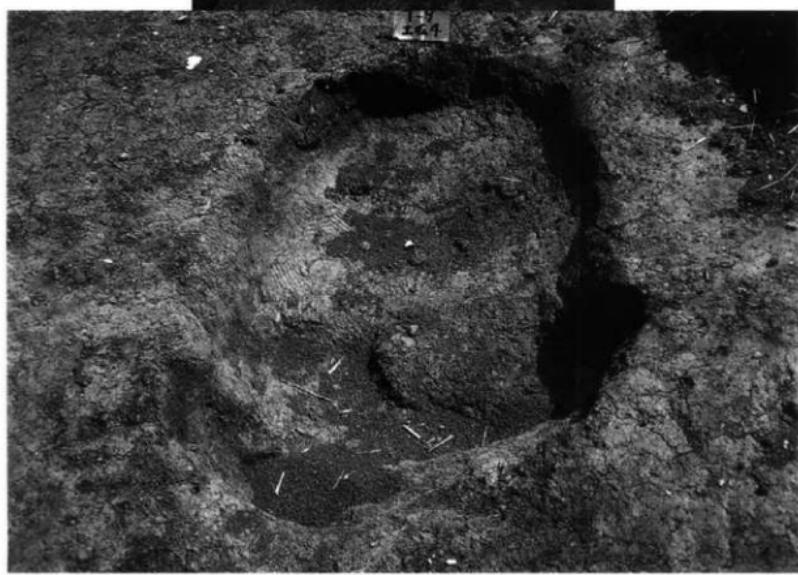
第1土壤



第2土壤



上から第2・3・4土壤



第4土壤

図版10



第1号塗立建物址

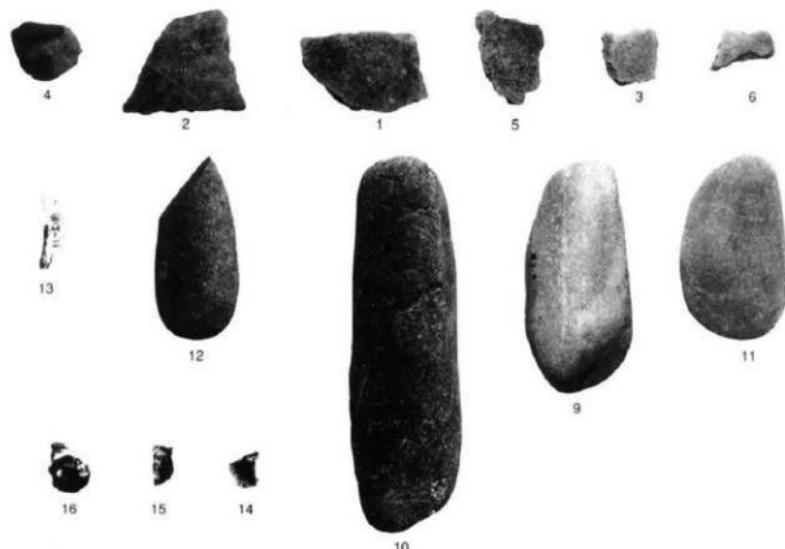


第2号塗立建物址

図版11

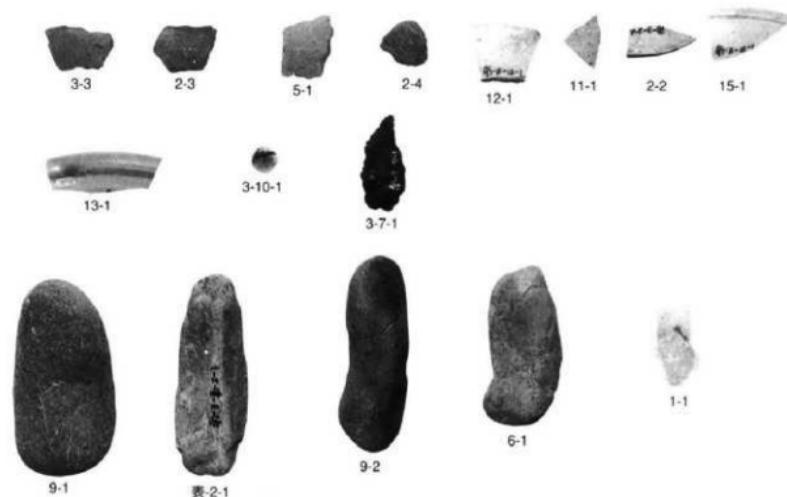


第1号住居址遺物(数字は遺物番号)

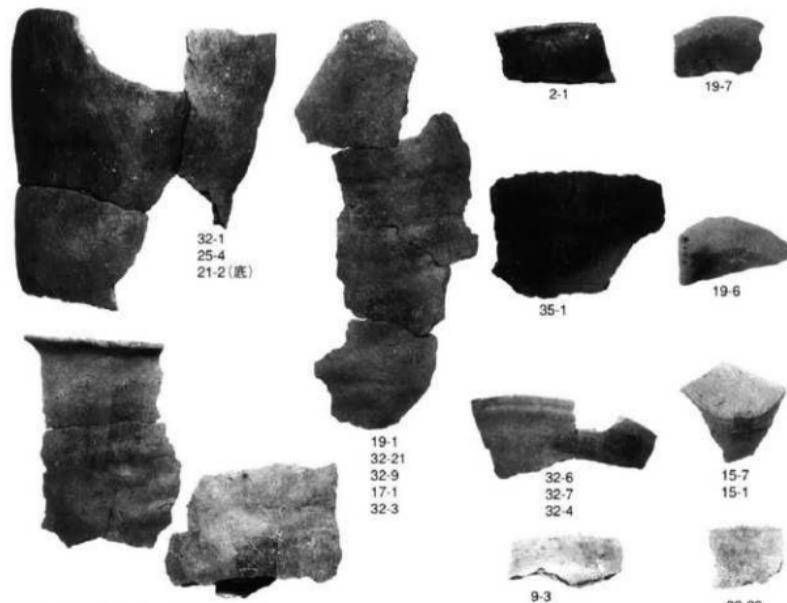


第2号住居址遺物(数字は遺物番号)

図版12

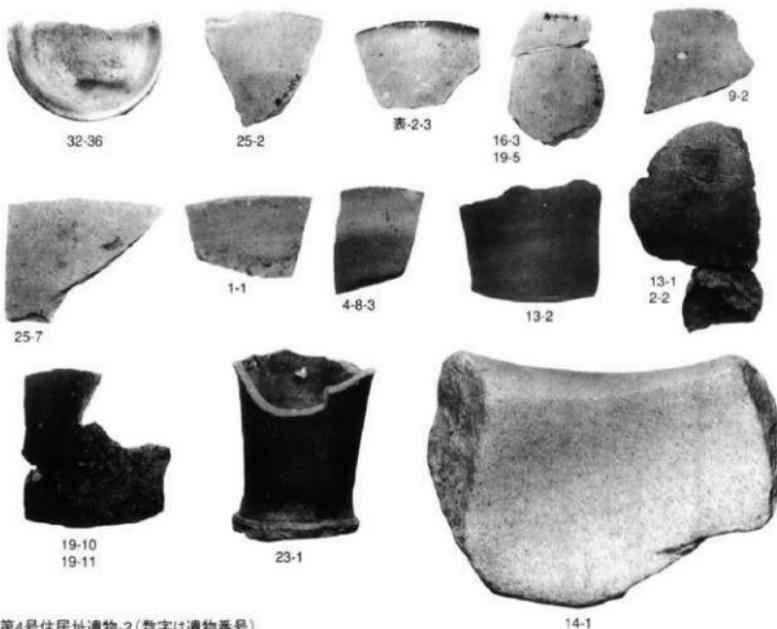


第3号住居址遺物（数字は遺物番号）

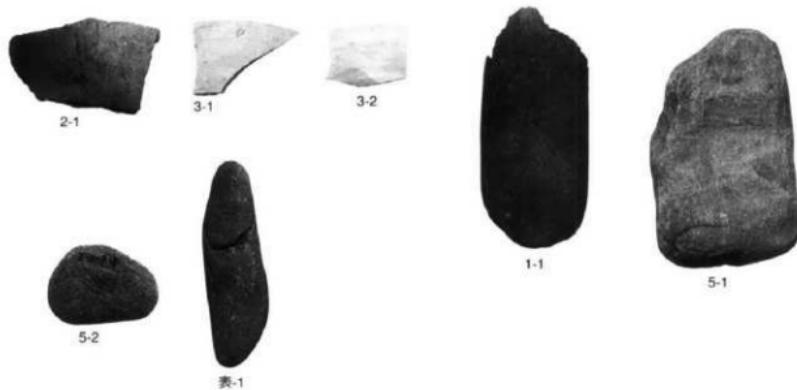


第4号住居址遺物-1（数字は遺物番号）

図版13

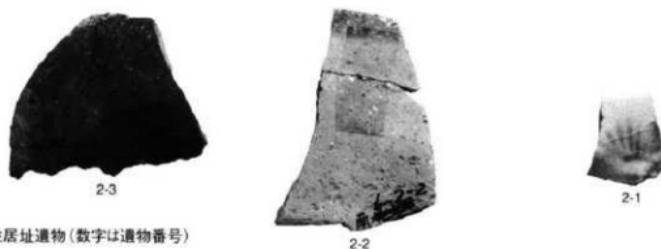


第4号住居址遺物-2(数字は遺物番号)



第5号住居址遺物(数字は遺物番号)

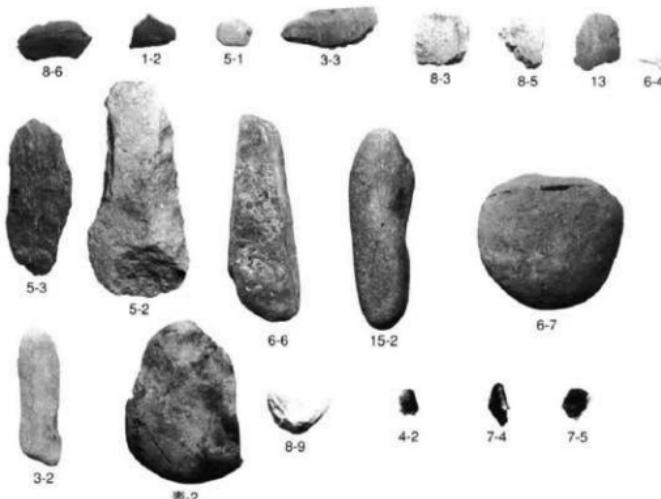
図版14



第6号住居址遺物（数字は遺物番号）



第7号住居址遺物（数字は遺物番号）



第8号住居址遺物（数字は遺物番号）

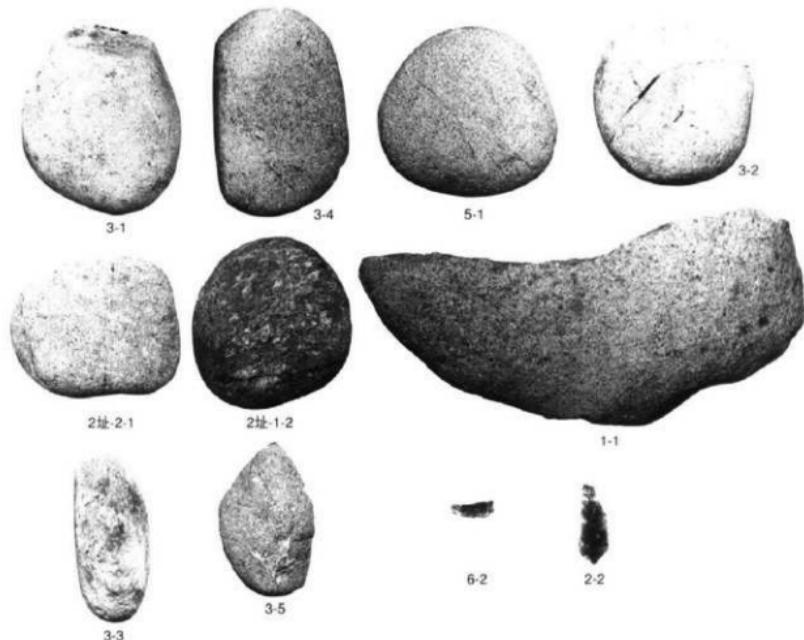
図版15



第9号住居址遺物(数字は遺物番号)



第1号址遺物(数字は遺物番号)



第2号址遺物(数字は遺物番号)

図版16



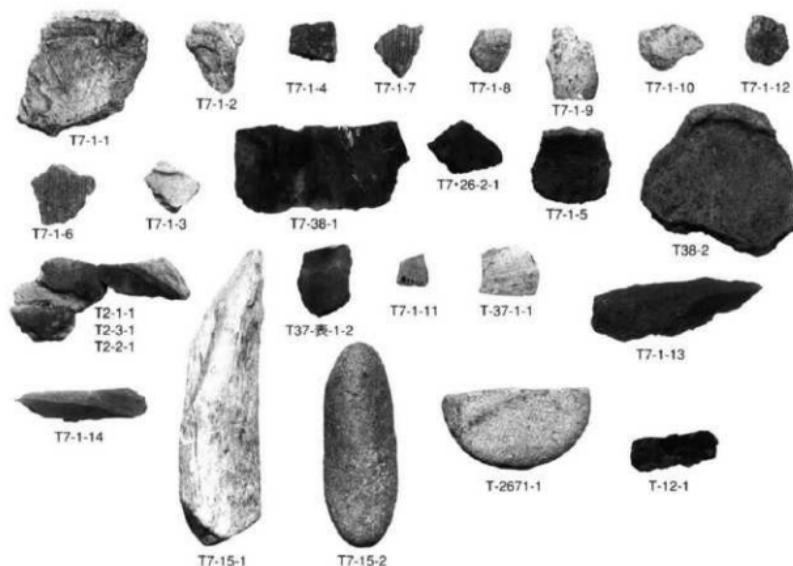
第3堅穴址遺物(数字は遺物番号)



第2号堀立建物址遺物(数字は遺物番号)



表探遺物(数字は遺物番号)



トレンチ調査遺物(数字は遺物番号)



第1住居址 石芯粘土窯



第2住居址 石芯粘土窯



第4住居址 石芯粘土窯

図版18



第5住居址 石芯粘土窯



第6住居址 石芯粘土窯



第9住居址 石芯粘土窯

図版19



起工式



発掘状況



図版20



発掘状況



南郷遺跡 説明会

報告書抄録

ふりがな	なんごう						
書名	南郷遺跡						
副書名	中山間地域総合整備事業に伴う溝口地区圃場整備事業						
巻次							
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
シリーズ番号							
編著者名	友野良一						
編集機関	長谷村教育委員会						
所在地	〒396-0402 長野県上伊那郡長谷村大字溝口1188-1 TEL0265-98-2009						
発行年月日	西暦2000年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
なんごう 南郷	ながのけん 長野県 かみいなぐん はせむら 上伊那郡 長谷村 おおざと 大字溝口 1490-1ほか	387	35° 46' 51"	138° 05' 28"	19990601～ 19990621	25,000m ²	中山間地域 総合整備事 業溝口地区 圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
南郷	集落跡	平安時代 縄文時代	平安時代後葉の堅 穴式住居址 9軒	縄文時代中期の土器 平安時代の土師器 須恵器	縄文時代前期の押形 縄文時代と平安時代 の遺物が検出されて おり、複合遺跡とし ての確かな資料を得 ることができた。		

中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

南郷遺跡

平成12年3月31日発行

上伊那地方事務所 伊那市大字伊那3497
TEL 0265-78-2111(代)

発行者 長谷村教育委員会 上伊那郡長谷村大字溝口1188-1
TEL 0265-98-2009
印刷所 杉本印刷株式会社 飯田市上郷黒田786
TEL 0265-24-6611(代)

